

目 次

1. 百万石蝶談会6年の歩み	吉村久貴(1)
2. ユキワリツマキチョウ飼育記録(最終報告)	金平永二(6)
3. 誘蛾記 1.有峰湖のフシキキシタバ	嵯峨井淳郎(8)
4. 石川県のカミキリムシ科(その1)	井村正行(10)
5. 1983年の撮影記録から	竹谷宏二(13)
6. ヒメシジミの異常型を採集	高平正明(14)
7. ムモンアカシジミ・獅子吼高原に産す	松田俊郎(15)
8. ウラキンシジミの1卵塊中の卵数について	野中 勝・ 中西重雄(16)
9. NOMURA-AKIRAの初体験<初めての採幼・採卵>	野村 明(17)
10. 年末スキー採卵	山岸善也(18)
11. あわれなミズナラ君その後	松井正人(18)
12. GT(グランドツーリング)採集記《白山三ツ谷の巻》	吉村貴己(19)
13. 図々しい俺	大島國雄(21)
14. 岩間丸石谷にてヒメオオクワガタを採集	吉村久貴(22)
15. 八月中旬信州開田高原にて	勝海雅夫(22)
16. 思い出ばなし その3<よのなか不思議なことばかり>	金子二久(25)
17. 凸凹採集記	中西朱美(27)
18. 記念号 オメデトウゴザイマス	小幡英典(29)
19. 蝶を撮る	田辺幸雄(29)
20. ヒロコの“YODAN”「翔50号に寄せて」	松井泰子(30)
21. フ化率を上げる採卵法	松井正人(33)
22. ゼフむだ話(5)石川県ゼフ採卵史	野中 勝(34)
23. リハビリテーションと採卵の効用	中西重雄(37)
24. ある山行	松井正人(38)
25. 簡易薄型標本箱試作2案	金子二久(39)
26. ある“昆虫展”を見て感じたこと	吉岡 泉(40)
27. ニューフェイス紹介(広畑政己)	野中 勝(41)
28. ニューフェイス紹介(諸道ひと美)	諸道秀人(41)
29. 例会の記録<年末座談会>	松井正人(42)

(表紙：伝統ある加賀友禅の図柄より)

百万石蝶談会が発足してまる6年が経過し、“翔”も50号を発刊するに至った。この間石川県内外の蝶類だけでなく、蛾類、甲虫類に関する記録集積の基礎となるデータが多数報告された。

この中には県内での生息が疑問視されていた種の再確認、稀種とされていたものの分布解明、採集・飼育法の改良など、新知見として注目に値するものもかなり報告されている。

またゼフィルス特集、オオヒカゲ特集、セセリチョウ特集、アサマシジミ特集など今後の蝶研究にとって貴重な資料となる特集号も刊行された。

50号発刊に際して、石川県産蝶類に関する問題提起 *1) [NO.13(1980)編集部(嵯峨井淳郎)]に何らかの解答となるべき蝶類の新知見を“翔”誌上に発表された中から注目種ごとに拾い、本会の現在までの足跡としたい。尚、本文中 []でくくったものは“翔”の文献を示す。

ギフチョウは、県南端の富士写ヶ岳から金沢市医王山周辺までの低山帯に連続的に生息し、個体数も多いため非常に多くの採集・目撃記録が報告されている。

食草調査の結果、県南の本種はナタデラカンアオイも食し *2)、金沢市周辺のものにはヒメカンアオイを食していることが報告され、一部ではフタバアオイを食していることも報告されている。*3)

本種は能登地方では生息が報告されておらず、白山地方でも標高の高い所では記録されていない。

手取川上流の深瀬、中宮地区でウスバサイシンの自生が報告されたが[NO.15(1980)松井正人]、ウスバサイシンを食するギフチョウの生息は確認されていない。隣県の庄川流域にはウスバサイシンを食するギフチョウが多数生息していることから、県内においても食草とされているか否か興味を持たれる。

また金沢市三小牛で採卵・飼育されたギフチョウの中から、県内産で唯一、イエローバンド個体が羽化したことが報告されている。

*4) [NO.23(1981)金子二久]

ウスバシロチョウも、加賀地方の山地よりに広く分布し、個体数も多いため採集・目撃記録が多数報告されている。[NO.13(1980)嵯峨井淳郎] 前種に比べるとやや山地にまで分布しており、白山地方の市ノ瀬や中宮でも採集されているが、比較的小型・白化の傾向がみられる。

1970年代までは能登地方における産地は宝達山に限られるとされてきたが、1980年代になって鳳至郡猿山、輪島市西部に生息していることが報告された。*5)*6) [NO.23(1981)特別寄稿 天野勝広] 猿山産の個体も黒鱗が発達しており、加賀地方の裏本州亜種と特に違いは見出だせなかった。

[NO.32(1982)嵯峨井淳郎・他]

現在能登地方での確実な産地としては、猿山と輪島市をつなぐ地域の数ヶ所だけで、宝達山での最近の記録はない。また白化の著しい個体が金沢市熊走で採集されている。[NO.32(1982) 嵯峨井淳郎]

ムラサキシジミは、県内で最も記録の少ない種の一つであるが、金沢市医王山(未発表 勝海雅夫)と山中町我谷 [NO.50(1985) 竹谷宏二] で記録され、細々と生息しているように思われる。

クロシジミは、犀川上流の金沢市日尾での1♀が最近報告された唯一の記録であるが *7) [NO.2(1978) 吉村久貴]、度重なる調査でも再発見されていない。

ゴマシジミは、白山地方の岩間丸石谷、岩間噴泉塔(未発表 山岸善也)、白山スーパー林道*8) で記録されているが、いずれも個体数が少なく著しく黒化している。

丸石谷での調査から、発生は7月下旬～8月上旬でカライトソウが食草となっていることが、卵確認により報告されている。[NO.10(1980) 松井正人]

スギタニルリシジミは、古くから白山地方で記録されていたが、最近金沢市近郊の日尾 [NO.4(1979) 吉村久貴]、菊水 [NO.41(1983) 金平永二] などで記録された。また山中町真砂 [NO.16(1980) 野中 勝]、小松市丸山町 [NO.44(1984) 竹谷宏二] などでも記録され、トチノキの自生地に広く分布することが報告されている。

県内に分布する *Strymonidia* 属の蝶としては、ミヤマカラスシジミとカラスシジミがリストに挙げられていたが、いずれも最近の記録がなく生息が疑問視されていた。

しかしつい最近になって、ミヤマカラスシジミの卵殻が白山釈迦道でクロウメモドキより見つけられ [NO.27(1982) 野中 勝]、吉野谷村木滑 [NO.34(1982) 松井正人]、金沢市菊水 [NO.35(1983) 野中 勝] で採卵が報告されて以来にわかには活気づき、金沢市近郊から白山地方にかけての各地に分布していることが明らかにされた。[NO.45(1984) 松井正人]

いずれもクロウメモドキからの採卵記録であり、1本の食樹から多数の卵が同時に得られている。また幼虫採集においても多数の幼虫が得られるが成虫の採集報告はされておらず、正確な発生時期はわからない。

同属のカラスシジミに関しては、再確認となる記録は皆無で現在全力をあげて調査中である。

ミヤマシジミは、1960年代に手取川の堤防や河原に多産したが、1973年*9) を最後に生息が確認されていない。現在でも食草となるコマツナギは広く分布している。

ヒメシジミは、1977年に白山地方の中宮蛇谷河原で1♂が本県初記録として報告された。*10) その後中宮で2例 *11)、[NO.8(1979) 金平永二]、白山砂防新道中飯場で1例 *11) 報告されたのみである。蛇谷においてハギより幼虫が1例採集されたが羽化には至らなかった。(未発表 勝海雅夫)

アサマシジミは、尾添川水系の中宮・岩間に生息し、*Lycaeides subsolanus* 群の分布西限に相当する。生息標高が600m前後に過ぎないにもかかわらず、高地性アサマシジミの翅表色を示すなど注目されてきた。

尾添川水系のアサマシジミの分布と食性の調査の結果、蛇谷、中ノ川、丸石谷に分布し [NO.48(1984) 野中 勝]、食草もナンテンハギ(タニワタシ)だけでなく、イワオウギも記録された。[NO.18(1980) 松井正人]

尾添川水系の調査と時を同じくして、称名滝以外での記録が皆無である富山県の早月川より、アサマシジミの生息が報告された。[NO.7(1979) 野中 勝]

富山県内での分布調査とあわせて報告されたのが、アサマシジミ特集号である。[NO.24(1981) 野中 勝・松井正人・嵯峨井淳郎・吉村久貴]

富山県内では片貝川南又谷での生息 [NO.31(1982) 松井正人・野中 勝] が新たに報告され、1976年以来記録の無かった称名滝では、1♂が再確認された。[NO.39(1983) 中西重雄]

石川県内に分布するゼフィルスは17種で、蝶談会発足当時までの記録 [NO.5(1979) ゼフィルス特集号 吉村久貴] とは変わっていないが、ゼフィルスの美しさにひかれた会員が多いため採集・採卵記録が多数報告され、市町村区分別の詳しい分布記録もまとめられている。[NO.29(1982) 百万石蝶談会]

ムモンアカシジミは、1958年に中宮で記録されて以来記録されず、再確認が望まれていたが、1984年に白峰村大杉谷で再確認され新聞紙上にも登場した。[NO.48(1984) 松田俊郎] 本種は白峰村百合谷 [NO.48(1984) 松井正人]、鶴来町獅子吼高原 [NO.50(1985) 松田俊郎] でも採集され、大杉谷では卵も確認された。[NO.48(1984) 松田俊郎]

ゼフィルスの分布調査はほとんどが採卵記録によるもので、会員の努力により採卵法が改良され、採卵困難とされていた種も次々と墮とされていった。[NO.50(1985) 野中 勝] 採卵技術の進歩と共に記録の増えたものとして、次の3種をあげたい。

オナガシジミはオニグルミからの採卵が行なわれるようになってから、多数の産地が記録された。白山地方 [NO.27(1982) 野中 勝・嵯峨井淳郎] だけでなく、金沢市近郊でも多数採卵された。[NO.27(1982) 松井正人]

メスアカミドリシジミは、以前より白山岩間や金沢市医王山(*7)*12)で成虫採集記録が数例報告されていたが、県内では稀種に属した。

サクラ類からの採卵が行なわれるようになって、金沢市医王山 [NO. 4 (1979) 野中 勝]、白山地方 [NO. 27 (1982) 野中 勝]、鶴来町獅子吼高原 [NO. 41 (1983) 松田俊郎] 小松市大日川上流 [NO. 42 (1983) 吉村久貴・野中 勝] などが報告され、比較的広く分布していることが分かった。

フジミドリシジミは、以前より医王山などで採卵成果の悪い種とされており、白山釈迦道で多数採卵 [NO. 2 (1978) 井村正行] された後も不作年が続いた。

1978年頃から比較的当り年となり、金沢市医王山 [NO. 42 (1983) 松田俊郎]、河内村 [NO. 44 (1984) 吉村久貴] で採卵され、愛好家の手元に安定供給されている。

ヒサマツミドリシジミは、富山県内ではあるが大多産地が発見された。本種は南方系の蝶で、以前まで福井県小浜市百里ヶ岳付近が北限とされていたが、富山県下新川郡東部での生息が報告された。*13) 1979年に神通川流域(婦負郡)のウラジロガシ大群落から、本種の生息が降雪期にもかかわらず調査を行った会長より報告された。[NO. 4 (1979) 井村正行] この流域は分布が広く [NO. 40 (1983) 吉岡 泉・吉村久貴] 密度も高く、秋口には♀成蝶も採集された。[NO. 25 (1982) 松田俊郎・嵯峨井淳郎]

県内に生息する Neptis 属の蝶のうち、ミスジチョウとオオミスジは記録が幾つか出され分布が比較的広いことが報告された。[NO. 10 (1980) 松井正人]

オオミスジの個体数が比較的多い金沢市小原の梅畑*14) では、幼虫も採集されている。[NO. 18 (1980) 諸道秀人]

コヒオドシは、白山での目撃記録だけであるが数例報告されている。時期は7月最下旬と思われるが、今後の調査を期待したい。

エルタテハは、県内で最も記録の少ない種であり、確実な記録として白山砂防新道甚ノ助ヒュッテの1例が報告されている。*11)

シータテハは前種よりも個体数が多いと思われ、記録も何例かが報告されているが、いずれも白山地方である。[NO. 44 (1984) 竹谷宏二]

オオヒカゲは、県内のジャノメチョウ科のなかで蝶談会発足後最も分布解明された蝶である。本種は能登地方で稀ではないとされてきたが、標本もほとんどなく分布も曖昧であった。

スゲ類からの幼虫採集による分布調査の結果、能登地方には広く分布し、いずれの産地でも個体数の多いことが報告された。[NO. 19 (1980) オオヒカゲ特集 嵯峨井淳郎・松井正人]、県産のオオヒカゲの食草となっているスゲ類も同定されている。[NO. 39 (1983) 松井正人]

ツマジロウラジャノメは県内では2化し、白山地方では7月頃に夏型、8～9月には秋型が発生する。特筆すべき分布としては、金沢市医王山の1例が報告されている。[NO. 33 (1982) 嵯峨井淳郎]

ヒメキマダラヒカゲも前種と同様白山地方には個体数も多いが、金沢市医王山でも1例が報告された。[NO.35(1983) 中西重雄]

県内のセセリチョウ科の分布集計の結果は、セセリチョウ特集号に報告されている。[NO.22 (1981) 松井正人]

キバネセセリはハリギリを食するため白山地方に記録があるが、津幡町の低山地でも記録されている。*15) ハリギリからのキバネセセリ幼虫の採集法も報告されている。[NO.33(1982) 松井正人]

ホシチャバネセセリは、加賀地方低山地で数例の記録がなされている。本種は暖地では2化するとされているが、県内でも6月と8月の2化が報告された。[NO.17(1980) 松井正人]

ヘリグロチャバネセセリは、これまでほとんど記録がなかったが近年尾添川水系で盛んに幼虫採集が行なわれている。

注目すべき新知見として以上のものをあげてみたが、コヒオドシ、ツماغロキチョウ、カラスシジミ、ミヤマシジミなど再確認の望まれる種、県内生息の新記録となる可能性のある種も残されており、今後の会員諸氏の積極的な調査をお願いしたい。

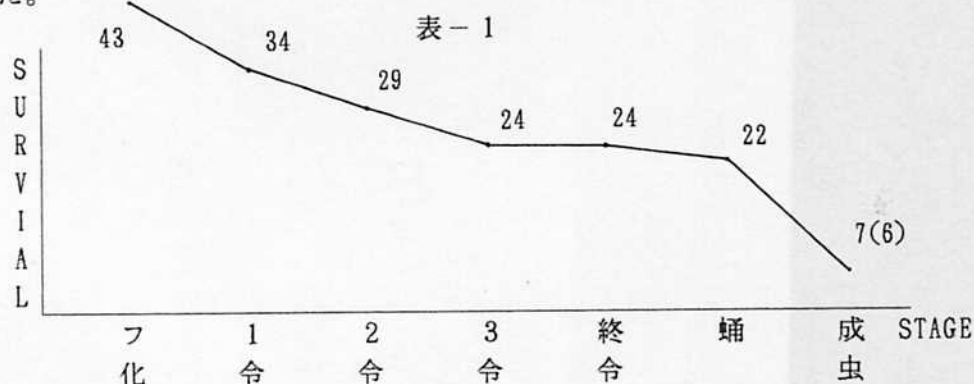
参考文献

- *1) 武藤 明(1978) 石川県の自然環境 4:61-67
- *2) 松本和馬(1978) 昆虫と自然 13(3):37-39
- *3) 松本和馬(1978) とっくりばち 41:3-5
- *4) 金子二久(1984) 月刊むし 158:11
- *5) 天野勝広(1981) とっくりばち 46:5-6
- *6) 竹谷宏二(1981) とっくりばち 46:10
- *7) 吉村久貴(1978) 昆虫と自然 13(13):35
- *8) 富樫一次
鳥島昭信(1978) 白山林道の昆虫類 :56
- *9) 武藤 明(1978) とっくりばち 40:5
- *10) 松井正人(1978) とっくりばち 41:2-3
- *11) 竹谷宏二(1979) とっくりばち 43:6
- *12) 吉村久貴(1979) とっくりばち 42:7
- *13) 五十君哲郎(1978) 昆虫と自然 13(6):35
- *14) 松井正人(1979) とっくりばち 42:2-3
- *15) 時国健太郎(1972) とっくりばち 19・20:4

前に *A. cardamines* ♀ × *A. scolymus* ♂ の実験的人工交配によるF1 (ユキワリツマキチョウ) の飼育経過を中間報告としてまとめ、「翔49号」に掲載した。30例をこえるカップリングの中から1例のみハンドペアリングに成功し、母蝶から53卵を得た。フ化率は81%であったが、幼虫期の死亡率は48.8%と非常に高かった。蛹化までの経過日数は平地における *A. cardamines*、*scolymus* のそれと差が無かったが、蛹期には非常に大きなばらつきがあった。10月20日の中間報告の時点までに、2例が不全羽化したがそれぞれ蛹期は14日と20日であった。その時点で羽化の前兆も無く死亡したとも思えない蛹が5例あり、越冬するかと思われたが、通常の保管状態にもかかわらず、本年(昭和60年)1月2日までにすべて結果が出そろったので、ここに報告する。

<第2次羽化群>

夏期を生きのびた5つのF1の蛹は、金沢市産 *A. scolymus* の蛹とともに外界と通風する直射日光のあたらない場所に保管した。昭和59年12月9日、保存状態のチェックと加湿のため、約1カ月半ぶりに蛹を観察したところ、F1の蛹のうち1例が羽化脱殻後の状態にあり、成虫は発見出来なかった。外界と交通する間隙より逃げたものと思われる。この例の蛹期はおよそ150日~190日である。残る4例のうち3例は♂の羽化前兆をみせており、最後の1例は不透明化が始まったところであった。このようにF1の蛹(第2次羽化群)に変化があったにもかかわらず、対照群として保管していた *A. scolymus* の蛹には全く変化がみられなかった。さっそく4つのF1の蛹を室内に移し、昼は20℃前後、夜間は2℃~8℃で保管した。このとき実に残念ながら羽化直前と思われる1つの蛹を操作ミスで殺してしまった。蛹の中では成虫が完全にできあがっていた。残る3例のうち2例は翌12月10日に相次いで羽化。2例とも完全羽化であり、外見上奇形・未熟部は無かった。最後の1例も徐々に色づき、年を越して1月2日羽化となった。これも完全羽化であった。表-1として生存曲線を完成させた。



なお、前回の中間報告「翔49号2ページ」の表-2の飼育経過に付け加えるべく蛹期をまとめておく。

第1群（夏期羽化）	①14日	②20日	
第2群（冬期羽化）	①150~190日	②193日前後	
	③193日	④193日	⑤226日

<雑交F1>

橙色班や前翅中室外側の黒班などは大体、前回記載した通りである。開長は42%前後で特に小さいとは思えない。下に稚拙ながら参考までに生きていたときのユキワリツマキチョウ成虫の写真を提示します。



花はヤツデです。

<まとめ>

1984年5月に *A. cardamines* ♀ × *A. scolymus* ♂ の雑交を試み、卵を得た。F1は幼虫期・蛹期とも死亡率が高かったが、成虫にまで達するものがいくつかあった。14日、20日と短い蛹期のものはいずれも不全羽化であったが、冬期に羽化したものはいずれも外見上完全な発育を見た。羽化したものも、前兆だけ見せて蛹内で死亡したものも例外なく総て♂の橙色班を現わした。羽化した例は総て♂の後尾器をもっていた。F1の形態を写真で提示した。

<あとがき>

ちょっとした悪戯心で始めた試みがついに実を結びました。まとめに書いたことはいずれもとても不思議な事だと思えます。自分の試みたことにどれほどの価値があるのか分かりませんが、知識の豊富な諸先輩方からの御意見、アドバイスなどがあれば幸いです。「これとこれを混ぜたらどんな色になるだろう。どんな形になるだろう。」このような素朴な好奇心を満たしてくれる雑種の実験をまたいつの日かやってみたいと思えます。

この学生時代最後のイタズラの実験の最終報告をもって「翔50号記念誌」の原稿にかえさせていただきます。百万石蝶談会の増々の発展と実り多き未来を祈りつつ。

1985年3月3日

フシキキシタバ *Catocala separa* LEECH の名の由来は、富山県高岡市伏木にて採集された標本により1889年に原記載されたものであることは既知のとおりである。

伏木港の岸壁に立ち東南方向を眺望すると、晴天の日には立山連峰の雄大な大パノラマを望むことができ、なぜこんなところで珍品といわれるフシキキシタバが採集されたのか…とつくづく考えさせられる。謎はそのまま謎である。

日本に産する *Catocala* 29種のうち、フシキキシタバは成虫の採集個体数が僅少なること、国内の産地が限局されることなどから、*Catocala* 最稀種に属する種とされている。

しかし1983年(*1)にクヌギによる飼育の成功、1984年(*2)にアベマキでの終令幼虫の発見、等々フシキに関する研究発表が相つぎ、今後は国内各地でフシキブームが展開されることが予想されよう。

石川県におけるフシキキシタバの調査は、野中勝氏、金子二久氏らにより数年前より県内に自生するクヌギ・アベマキ林縁を目標に桃蜜トラップ・ライトトラップを重ねておられるが、しかし、今だ発見確認されず徒労に終わっている。

由来地富山県では、1982年8月24日、中川秀幸氏(*3)により有峰湖周辺において2頭のフシキキシタバが19年ぶりに採集確認された。

この情報を石川カトカラ狂人A、B、Cが見逃すはずもなく、当時早速有峰へ足を運んだのである。出発に先だち、中川秀幸氏(富山県昆虫同好会々員)に電話にて1982年8月の採集状況を御教示願った。幸いにも中川氏には我々の要望に対し心良く応じて頂くことができ詳細な状況を懇切丁寧にアドバイスしてもらうことが出来た。

1983年8月6日、多忙を極める野中氏の仕事の終わるのを待ち、金沢を発つ。久し振りに岐阜県側より有峰へ入る。途中、ルリボシカミキリなどの副産物を毒瓶に入れる。ロザリアは健在なり。

3時間後、有峰湖・東谷～西谷のフシキポイント着。(記念碑のベンチ有り)

日暮れ前の現地調査では、我々の過去のカトカラ採集ポイントの条件に比較し格別に好条件とはいいい難く、見晴らしなどは最悪だった。ここでのライトトラップ設置をあきらめ、湖をはさんだ対岸の良く見える場所に移動しブラックライトを設置する。

一方この日は富山県昆虫同好会の蛾屋さん、甲虫屋さんも大多和峠にてナイターの設置をしておられ、くしくも石川・富山のナイター合戦となった。富山県昆虫同好会の方々の設備はさすがに1日の長があり、光源は我々の数倍、場所も良いとあって多数の飛来蛾があったようである。午後7時過ぎ、期待に胸ふくらませ、いざ点灯。カトカラはオニベニシタバ、エゾシロシタバ、マメキシタバ、ゴマシオキシタバなど少々飛来するのみでケンモンガやシャチホコガ

などを物色しながら、フシキは来ないのかな…と思案溜息。延々と実に4時間ねばる。途中、富山勢の中川秀幸氏他3名の方々の訪問をうけ、互いに「まだ来ませんか?」「いやまだ来ません」と相手方を牽制しあったりする。

当方も大多和峠の富山勢を訪問する。(こちらは我々に比べて飛来している蛾はかなり多い) ナイター設備の立派さに負い目を感じながら『負けそう』とはおくびにも出さず我陣地へ引きあげる。

午後11時、幾分心中疲労を覚え、『駄目だったな…』と敗北を認めながらも気を取り直し『ここは、いないのだ、場所を変えよう』ということになり、真っ暗な林道を何処か見晴らしの良い場所はないかと物色しながら、いつしか青少年キャンプ場を過ぎ有峰ダムサイト迄来てしまう。ダムの灯が頂度隠れる位置で再度ライトトラップを設置する。時間は夜中の24時を過ぎた。野中氏は昼間の仕事疲れでもう眠りたそうで渋々僕の相手をしている。ここは風当たりが少々きつい。これは駄目かな…とフッと弱気が心をかすめる。路肩のコンクリート製のガードにロープを張り、それにブラックライトと白色蛍光灯を下げる。強風にあおられ白色蛍光灯が1本「ボン」と割れてしまった。一抹の不安が心をよぎる。「それじゃ、僕は車の中にいますから」と野中氏は野営を決め込んでしまった。独りで『フシキよフシキ、おまえは何とフシギな蛾なのだ』とブツブツつぶやいていたら、「オッ」明かるいボーッとした黄色いのが2頭続けて白い幕に突き当たって来た。おびたしい数のヤスジシャチホコがうとうしい。今迄に手中にした数々のキシタバと明らかに違う。『フシキだ!』…手が震える。ネットを振る。(僕は蛾屋さん独特の大きな毒瓶は使わない)…採れた…まさしくフシキだ。採れたばかりのフシキキシタバはオレンジ色の羽を震わせている。「オーイ」「オーイ」とわめく僕の声に野中氏が飛び起きて来る。すかさず腕の良い野中氏は1頭ネットインする。

更にもう1頭採った後はシーンと沈黙の世界。合計3頭のフシキを採集したことで今日の目標は100%達成。ドッと疲れが出てきた。大いびきで夢路に入る。

翌朝、中川秀幸氏に成果報告したのち、かつての有峰産ムモンアカシジミのポイントで酔っぱいに絡まれ(朝から酒をくらって家宅侵入罪をのたまっておった)ムモンアカは絶滅したことにして調査もそこそこにして下山する。

この1週間後、金子二久氏も彼の地を訪れ、キャンプ場周辺で2頭のフシキキシタバを採集されたという。

この年5頭のフシキキシタバが石川カトカラ狂人の標本箱に納まったことになる。



なお、蛇足ながらシャチホコガ科のゴマダラシャチホコ1雌が、野中氏の同定により同日の採集品の中にあるのが確認された。日本産蛾類大図鑑によれば雌は未知、食草は未解明の由とのことを付記しておく。

参考文献

1) 川島保夫・

堀江清史(1983) フシキキシタバの生態と飼育例 月刊むし(153):6-7

2) 那須 敏(1984) フシキキシタバ幼虫発見始末記 月刊むし(165):27-28

3) 中川秀幸(1982) 有峰の蛾3種 AMICA(27):274 富山昆虫同好会編

—— 石川県のカミキリムシ科(その1) ——

井村正行

県内産のカミキリムシ科は現在までに採集例を記載してまとめられたものが無い様なので、採集記録の新しいものを中心に県内での生態等を交えて発表したいとおもう。採集標本またはデータの確認出来なかったものは確認できしだい付け加えたいと思う。

データ-中多数例は記録の多いことを示し、若干例は同普通を示し、数例はこれまでに数例の記録しか無く稀、1~5例は非常に稀な事を示す。

ノコギリカミキリ亜科 Prioninae

1. ベーツヒラタカミキリ Eurypoda batesi GAHAN

県内各地の平野部で少ないながら採集されている。加賀市大聖寺付近での本種の採集例としては、夜間スダジイの立枯木や生木のウロなどがあげられる。

1969年 7月19日 1♂

七尾市百海町

松枝 章

1981年 8月10日 1♂1♀

加賀市大聖寺町

井村正行

他 数例

2. ウスバカミキリ Megopis sinica WHITE

平地~山地帯にかけて広く分布。燈火やブナ科、ヤナギ類サクラ類クス科等の木のウロや樹皮下などで見ることができる。また、夜間ブナ林の生木、立枯木等で活動している本種を多く見た事もある。発生期7~9月。

1980年 8月 3日 1♂

白峰村市ノ瀬

井村正行

他 多数例

3. ノコギリカミキリ Prionus insularis MOTSCHULSKY

平地～山地帯にかけて広く分布し、燈火や夜間に伐採木上で本種を見る事ができる。また、マツやブナの立枯木に産卵中の本種の♀を見ている。
発生期 6～9月。

1979年 8月10日 1♂ 鹿島町石動山 井村正行
他 多数例

4. ニセノコギリカミキリ Prionus sejunctus HAYASHI

平地～低山帯に分布しているようだが個体数は少ない。マツ類の立枯木や、燈火に飛来したものが採集されている。7～8月。

1980年 8月 5日 1♂ 加賀市橋立町 野中 勝
1980年 8月15日 1♂ 加賀市大聖寺町 井村正行
他 数例

5. コバネカミキリ Psephactus remiger HAROLD

県下のブナ帯に広く分布していると思われるが白山山麓以外の記録は、大変少なく、能登の宝立山及び犀川上流の倉谷で採集された2例以外はまだ記録を聞かない。白山でも個体数は多くないようである。7～9月。夕方から夜間にかけて伐採木やブナの立枯木にいたものが採集されている。

1980年 8月10日 1♂1♀ 白山大杉谷林道 井村正行
1980年 8月26日 4♂ 白山釈迦林道 井村正行
他 若干例

クロカミキリ亜科 Spondylinae

6. クロカミキリ Spondylis buprestoides LINNE

平地～低山帯に広く分布している。アカマツ等の切株等にいるものや、燈火等に飛来したものが採集されている。個体数も多い。発生期 6～9月。

1979年 6月15日 1ex 宇ノ気町木津 井村正行
他 多数例

マルクビカミキリ亜科 Aseminae

7. ケブカヒラタカミキリ Nothorhina punctata FABRICUS

県下の平地～低山帯に広く分布し、アカマツやクロマツ等の大木の残っている所にはかなりの高率で食痕を見ることが出来る。個体数も少なくない。発生期 7月下旬～9月。ホストはアカマツ及びクロマツ。

1980年 8月25日 1♀ 金沢市宝町 野中 勝
1980年 8月15日 1♂ 金沢市野田山 井村正行
他 若干例

8. ツシムナクボカミキリ Cephalallus unicolor GAHAN

倉ヶ岳においてアカマツの立枯木に夜間活動しているのを入場登氏が確認
採集している他は、燈火に飛来したものばかりが採集されている。7～9月。

1980年 8月 8日	1♂	吉野谷村吉野	井村正行
1981年 7月 20日	1♂	金沢市医王山	野中 勝 他 若干例

9. サビカミキリ Arhopolus rusticus LINNE

倉ヶ岳において前種に混ざって活動中の本種を入場登氏が確認採集してい
る他は、燈火に飛来したものが採集されている。8月～9月。

1980年 8月 15日	1ex	加賀市橋立町	井村正行
1981年 8月 30日	1ex	金沢市医王山	金子二久 他 若干例

10. オオクロカミキリ Megasemum quadricostuiatum KRAATZ

過去に記録はあるが、著者は確認できなかった。

11. トドマツカミキリ Tetropium castaneum LINNE

この種に関しては、採集した入場登氏によると採集地からして金沢港に入っ
た輸入材について来たものではないかとのこと。

1972年 7月 9日	1♂	金沢市諸江町	入場 登
			採集例は上記1例のみ

12. オオマルクビヒラタカミキリ Asemum striatum LINNE

石川県において採集記録があったがそれを確認することが出来なかった。
1984年 7月白山スーパー林道の県境においてキタゴヨウマツにいた本種が確
認されている。

1984年 7月	2♂ 2♀	吉野谷村三方岩岳	野中 勝 他 不明
----------	-------	----------	--------------

ホソカミキリ亜科 Disteniinae

13. ホソカミキリ Distenia gracilis BLESSIG

平地～ブナ帯上部に広く分布し燈火や伐採木等で見られる。白山市ノ瀬で
は、燈火に飛来する本種を多く見かける。個体数も多い。7月～9月。

1981年 7月 9日	1ex	金沢市医王山	野中 勝
1981年 9月 6日	4exs	白峰村市ノ瀬	井村正行 他 多数例

この年は7月～8月にかけての最盛期に仕事の関係でほとんど撮影に出かけることができなかった。従って余り目ぼしい記録はないが、山中町でのムラサキシジミは筆者が県内で初めて見たものであった。能登地域においてはデータが少ないので普通種を含めて総てを記録した。以下の記録は総て目撃あるいは写真撮影で確認したもので採集はしていない。

1983年 4月14日 石川郡吉野谷村佐良 ギフチョウ

1983年 5月 1日 石川郡野々市町横宮 ジャコウアゲハ 1♀

スーパー「ジャスコ」の店頭に並べられた販売用のツツジの花で盛んに吸蜜していた。コンクリートに囲まれた街中で必死(?)に吸蜜している汚損した♀の姿に一種の感動を覚えた。

1983年 5月10日 小松市今江 ジャコウアゲハ 3♀♀ 2♂♂

1983年 6月18日 羽咋市柳田

ゴイシジミ

ルリシジミ

ツバメシジミ

1983年 6月29日 江沼郡山中町菅谷

ミドリシジミ

ミズイロオナガシジミ

1983年 6月29日 加賀市奥谷 ミズイロオナガシジミ

1983年 6月30日 江沼郡山中町我谷

ムラサキシジミ 1ex

ウラキンシジミ 1♂

ミズイロオナガシジミ

ウラクロシジミ

アカシジミ

ホシミスジ

県内でムラサキシジミを見たのはこの時が初めてである。道端からパッと飛び立った瞬間ムラサキの斑紋がキラリと光った。カメラの全く届かない高い樹上に静止したので、幹をたたいたり押したりしているうちにさらに上方へと姿を消してしまった。

1983年 9月 1日 羽咋郡富来町酒見 ジャコウアゲハ 多数

酒見付近の用水の堤防や畑地の土手にウマノスズクサが多数自生しており、本種は極めて多産する。地元の話によれば、8月の旧盆頃は多数の個体が乱舞する由。

1983年 9月17日 石川郡尾口村岩間温泉

シータテハ 2exs ツマジロウラジャノメ 7exs

ツマジロウラジャノメは岩場が好きだ。岩間温泉周辺の林道沿いでも、ちょっとした岩場があれば例外なく本種が生息している。飛び方は極めて緩やかなので簡単に撮影出来そうであるが、現実には全く逆である。岩上や各種の花でよく吸蜜するが静止時間は非常に短い。岩壁を見上げて首が痛くなるまでねばっても撮影できる保障はない。

1983年 9月23日 羽咋郡富来町大福寺

ミドリヒョウモン ウラギンスジヒョウモン
メスグロヒョウモン 5♀♀ カラスアゲハ アゲハ
アオスジアゲハ アサギマダラ キチョウ
クロヒカゲ ベニシジミ ヤマトシジミ
ウラギンシジミ

メスグロヒョウモンは普通種だというのにどういう訳かまだ一度もお目にかかっていなかった。ところがこの日、能登富士・高爪山の中腹の伐採地でようやく会うことができた。アザミ類で吸蜜するものが多かったが、雑木林の中ではコナラの樹幹に産卵する個体も観察できた。

1983年 9月29日 珠洲市鶴飼

ミドリヒョウモン ウラギンスジヒョウモン キチョウ
イチモンジセセリ ゴイシジミ ベニシジミ
ウラギンシジミ

1983年10月17日 鳳至郡能都町瑞穂

ルリタテハ ヒメアカタテハ キチョウ

———— ヒメシジミの異常型を採集

———— 高 平 正 明 ————

1982年7月11日中西氏、松井氏、岩下嬢（現松井夫人）と共に富山県大日平へミヤマモンキチョウを見にいった帰り道、称名滝付近の変電所裏でヒメシジミを採集してきたが、中西氏が採集した中にアサマシジミが1頭見つかり、うらやましくて仕方が無かった。私は未だにアサマシジミが採集出来ずにいる。

1983年7月13日同じ場所へ出向いたがその日の天候は曇り、風も少しあり採集には向かない日であった。それに、前年行った時はあれ程沢山いたヒメシジミが全くいないので、不思議でもあり「時期的なズレがあったのか…」と思いつつ、心の中まで天気のように暗くなった。あきらめて帰ろうかと思ったとき、黒っぽいシジミがどこからともなく目の前に飛んできたので“アサマだっ！”

と思って必死にネットを振った。三角紙に入れたらアサマシジミとは「こんな“黒っぽい”ものだったかなあ、おかしいなあ」という思いがした。柳の下のだじょうを狙って1時間程ねばってみたが、天気は益々悪くなってるのであきらめて帰路に着いた。しかし内心たまに出ればさっぱりだどつくづくおもった。

後日、松井氏と野中氏に見てもらい、ヒメシジミの異常型であろうとのことだった。その又後日、竹谷氏に写真を撮ってもらい、今日迄の進展もせぬまま現在に至っている。



私は仕事の多忙に輪をかけ、1984年度は長男、次男の剣道教室の世話のうえ、83年84年と第3子、第4子の子宝に恵まれ、家族共々育児にあくせくしている状態なので、なかなか飼育という世話も出来ず、採集のみに徹底するつもりであるが、それも当分はかなえられそうにないようである。このような落第会員では申し訳なく思う日々ではありますが、今後とも会員の皆様何卒宜しくお願い致します。

———— ムモンアカシジミ・獅子吼高原に産す ————
———— 松 田 俊 郎 ————

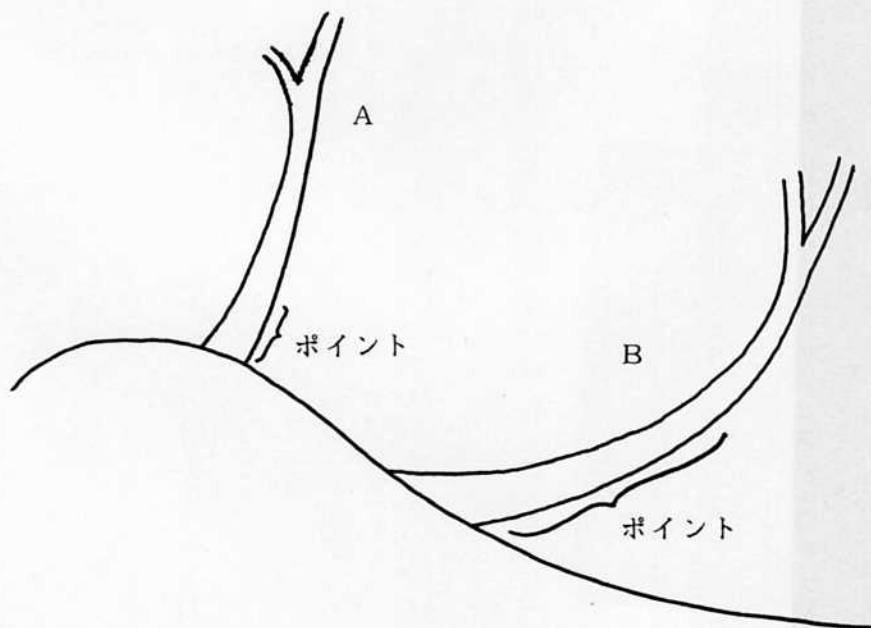
1984年8月17日、石川郡鶴来町獅子吼高原においてムモンアカシジミを採集しているので報告する。この記録は採集頭数がわずかに1頭であること、発生地が不明などの理由から当初は発表するつもりはなかったのであるが、県内におけるこれまでのムモンアカシジミの記録地からはかなり離れているので、あえて公表することにした。採集個体は雌で、比較的新鮮であり尾状突起もそろっている。なお、採集した木（ミズナラ）には、残念ながらアリは見あたらなかった。おそらく近くに発生地があるものと思われる。

今年ぜひこのムモンアカシジミの発生地を見付けたいと思っている。もし見つけることができれば、幼虫も成虫も大量に採れ、採卵もでき、かつ生態観察も楽にできる…と思うのは甘い考えであろうか。

小松市鞍掛山において、1984年12月9日マルバアオダモよりウラキシジミ卵を127卵採集した。1卵塊中に含まれる卵数を調べてみたのでその結果を報告する。

1卵塊を構成する卵数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
頻 度	12	8	4	2	2	2	3	2	1	0	1

また、本種の採卵法はあまり普及していない様なので、以下に簡単にポイントを解説してみたい。これまでに石川県では3種の食樹、標高400~800m位の間でマルバアオダモ、それ以下でヤマトアオダモ、それ以上で未同定の *Fraxinus sp.* (未発表) が確認されているが、これまでの経験からいって一番採卵が容易なのはマルバアオダモである。従ってまずほどほどの標高の山地にいき、根元が腕の太さ位のマルバアオダモを捜す。最大のポイントは図Aに示した様に、地上0~30cm位の間の割れ目デコボコなどで、もちろん斜面の下に面した側が良い。その他、分枝部のシワや滑らかな樹皮部にも産まれる事もあるが少ない。樹は太すぎるとシワ、割れ目が多すぎて捜すのが大変だし、あまり細い樹には卵がついてない事が多い。又、本種の採卵におけるもうひとつのポイントは、山頂、尾根など平坦な所で捜すことで斜面にあるマルバアオダモは、根元で下へ向かって生えていることが多く、図Bの如くポイントが広くなりすぎて採卵しにくい。諸君！加賀山地のマルバアオダモで腕を磨いて能登のウラキシジミの記録に挑戦しよう。太さが一抱え以上もある巨大なヤマトアオダモが君を待っているから。



竹谷氏の紹介で百万石蝶談会を知り、嵯峨井宅にて蝶採集の魅力を知り、特にゼフィルスのあの色光沢に魅せられてしまった。

1984年 6月 3日(日)

吉野谷村中宮でのバーベキュー大会を兼ねての幼虫採集に参加。中宮への途中、松井氏の案内でヘリグロチャバネセセリの幼虫を採集した。内2頭羽化し両方とも♂。その後アサマジミの幼虫も5頭採集し内3頭羽化、3頭とも♂。展翅も相手はかなり小さいので、てこずってしまった。

1984年 6月24日(日)晴れ

金沢市医王山へ行く。展翅の練習と思いアゲハ、ヒョウモン、テングチョウ、などを採集していると、途中嵯峨井氏と逢いゼフィルスのポイント、発生する時間など教わった。その日の収穫は、エゾ2♂、アイノ6♂1♀、アカシジミ4♂。実はそのころまだ長い柄のネットを持っていなかったもので、嵯峨井氏に採ってもらった。

1984年 7月 1日(日)晴れ

医王山へミニバイクで採集に出掛ける。さすがミニバイクでは避難小屋までは行けず、舗装していない所からは歩くことにした。途中勝海氏と逢う。話をしているうちに同じ蝶談会の先輩と聞きびっくり。一緒に避難小屋の上のポイントでネットを振っていると、竹谷氏がカメラを片手に現われた。始めはだれか分からず、勝海氏から紹介され二度びっくり。TELで一度だけ話をしただけで、お顔はTVで拝見していたけれど実際に逢うのは初めてで、もし勝海氏に逢っていないければ、10月6日(土)の例会まで分からずじまいであったと思う。その日の収穫はアイノ9♂、アカシジミ1♀。

1984年10月 7日(日)くもり

8:00am~7:00pm勝海氏と白山釈迦道へフジミドリの採卵。途中メスアカミドリシジミの卵のありそうな枝を切ってみたが1個もみつからず、今日第1の目的のフジミドリのポイントへと車を走らせた。ポイントでは勝海氏から卵の付いていそうな枝や、卵の付く枝の部分などを教えてもらった。まず目標15個として採卵を始めた。その日は最終的に勝海氏60卵、僕19卵でした。

昨年は注文した道具がなかなかそろわずイライラしたけれど、今年は標本箱もそろい昨年展翅した蝶を並べてニヤリ。

今年もマイペースで採集に行こうと思います。又皆さんにご迷惑をおかけすると思いますが、よろしく願います。

1984年12月31日(日)、雪のち曇。中西、野中、松井氏らと私の4人は、今シーズンからオープンした石川県吉野谷村の中宮温泉スキー場にてゼフの採卵を行なった。

午前8時30分に中西氏宅に集合し、松井氏のレオーネ4WDで出発した。午前10時頃まで雪が降り止まないため不安になってきたが、スキー場に着く頃にはすっかり雪も止みひと安心。大晦日だというのにゲレンデはかなりのスキー客でにぎわっていた。4本のリフトを乗り継いで標高約1000mの頂上までくると、ブナ林が広がっている。ここからの見晴らしはすこぶる良い。さっそくフジミドリ卵を求めて1時間程頑張ったが、結局各自1卵ずつしか採れなかった。昼食をとって山を少し下りると、ミズナラ林が見られる。ここで多数のジョウザンミドリの卵を得た。松井氏が8mほどある1本のミズナラにするすると登り、頂上付近の枝を数本切り落としたりと、ジョウザンミドリに混じってアイノミドリの卵も見つかった。アイノミドリ卵は卵表面の突起、卵の大きさともに他のゼフ卵と比べて大きくみごとなために、すぐ区別がつく。その他ウラミスジ、エゾミドリ、アカシジミ等の卵も少しずつ採れた。午後4時には山を下り金沢へ帰った。今回採った卵は他の3人の方々の御好意により、すべて私がいただくことになった。春からの飼育が楽しみだ。

1984年12月31日 石川県吉野谷村中宮温泉スキー場

ジョウザンミドリシジミ	82卵	(ウラミスジシジミを含む)	
アイノミドリシジミ	5卵	ミズイロオナガシジミ	5卵
フジミドリシジミ	4卵	エゾミドリシジミ	3卵
アカシジミ	3卵		

あわれなミズナラ君その後

松 井 正 人

石動山での採卵が全くスカだった4人組は、まだ時間があるので宝達山でイモ掘りでもして帰ろうということになった。宝達口より舗装道路を快調に上っていくと、道路脇にエノキがあったのでオオムラサキでもないものかと捜してみたが、ゴマダラチョウの幼虫ばかりだった。かなり上の方まで上った所でイモ捜し。野中氏はイモ掘り初体験、中西氏と連れ立ってニコニコして山中へ。時期も遅かったせいかなかなかイモヅルが見付からず、1時間位でやっと小さなイモが1本採れた。これは野中氏のお土産となった。せっかくここまで上って来たのだから、2年前に松井氏が登ったあのあわれなミズナラ君(註1)はどうなっているか、見に行くことになった。

あわれなミズナラ君に着いたのは16時頃で、ミズナラ君は枯れもせず元気な芽をたくさん付けていた。石動山では全くスカだったので、採れないだろうが2年前はジョウザンミドリ2卵が採れたので、また登ってみることにした。枝を2、3本落とすとすぐエゾが見付かった。ついでアイノが、アイノが見付かったとなると、井村氏、野中氏が元気づき、野中氏は、「この木だ！あの枝だ！」と大騒ぎし、井村氏はイソイソと登っていった。

暗くなる頃より採れないだろうで始まったものだから、採れだすとその勢いは大変なもので、ついに最後は車のヘッドライトの明かりで卵を捜していた。約1時間薄暗い中で採卵したせいか、エゾの3分の1位は寄生卵かフ化殻だった。下記に4人の成果を示す。 (㊦1 翔 NO.36 宝達山採卵行)

1984年11月25日 羽咋郡押水町宝達山

アイノミドリシジミ	5卵	ミズナラ
エゾミドリシジミ	13卵	ミズナラ
ミズイロオナガシジミ	1卵	ミズナラ
オオミドリシジミ	1フ化殻	コナラ
ゴマダラチョウ	幼虫	エノキの下

—— GT(グランドツーリング)採集記《白山三ツ谷の巻》 ——

吉村貴己

GT = grand touring・GTとは何か？ 日本にモータリゼーションの波が押し寄せてきて、高速道路、自動車専用道路、バイパスが日本各地に整備されている今日この頃。国鉄は赤字に悩み、赤字民営化(分割民営化)が騒がれている。それはモータリゼーションが発達すると、それに反比例したように国鉄利用客が減ってきたためである。60年3月のダイヤ改正の内訳を見てみると幹線系でも昼行急行がほとんど姿を消し、北陸線でも急行“くずりゅう”(金沢～米原間)が姿を消し、昼行急行は全廃となる。筆者が幼い頃北陸線に“ゆのくに”、“立山”、“越後”など懐かしい名前の急行が走っていたのが、ついこのあいだのように思い出される。

しかしモータリゼーションの波が押し寄せたといっても、日本の自動車産業を見てみると昭和50年を境にして、排気ガス規制・燃費が騒がれ、筆者がGTと呼ぶにふさわしい車は細々と息をつないできたように思う。筆者がGTという名前で呼ばれる車でGTの名にふさわしいと思われる車はセリカぐらいなもので、他の車は“名ばかりのGT”と言いたい。ではいったいGTとは何か？ それは自動車会社によってまちまちである。ある会社ではDOHC(Double Over Head Cum Shaftの略、別名Twin Cum)エンジンを搭載したグレードにつけられる名前である。またある会社ではフロントマスクの違いでファミリーカーとスポーティーカーを分けるために使っている。筆者はGTの名をエンジンの耐久性・性能に最も優れた車に与えるのがベストであると考えている。しかしGTの名の本質を探る

と、人間と車のマッチ・フィーリングが最もベストであり、多くの人々からもっとも支援を受けられる車につけるべきものと思われる。今日の風習を探ると、GTの名とは最も高い車や昭和50年以前で日本のレースで活躍した車に与えられている。

筆者宅にある車の一台は、GTの名がついたトヨタセリカカムリ2000GTである。筆者はこの車にGTの名が与えられているのは、思うにDOHC搭載であるだけではなく、4ドアであり乗り降りが便利だし、4輪独立懸架のサスペンションの足を持っているため乗り心地がいいし、車のデザインがただ単にかっこいいとかいうのではなく、空力抵抗を考えたデザインであるということなどがあげられると思う。この車でGTの名のふさわしくない部分はボディの作りがいまいちしっかりしていない、内装がいまいち良くないということである。内装についてはこの会社の方針でGTの名の車はエンジンがDOHCであるから、少々最高の内装よりは落としたものにするところがあるので仕方がない。ボディの作りに関してはしっかりしていて、少々力が加わっても平気なものとしてほしい。しかし筆者が少々不満に思う部分を最高のものにする、価格が300万ぐらいになると思われるので無理な願いであるということは否定出来ない。自動車会社にしても売ることが最重要な課題である以上は、1984年の夏はカムリ2000GTを少々酷使したかもしれないが、5日間ぶっ続けで採集に出掛けた時もあるので車について少々述べてみた。

さて1984年の夏にカムリ2000GTを使って採集に行った場所で、甲虫の採集場所となった白山三ツ谷について述べてみたいと思う。1984年8月15日ムモンアカシジミの採集で気分が最高潮に達した後、連日の猛暑の中部屋でクーラーにあたっていたい気分を捨て白山三ツ谷に出掛けた。三ツ谷は以前にもクワガタ採集に出掛けたが、アカアシクワガタしか採れず、白山湯ノ谷でヒメオオクワガタが採れてアカアシクワガタも採れるのにどうして三ツ谷では採れないのかと思っていた。第1の要因は標高差にあると思われるが、どうしても三ツ谷でヒメオオクワガタが採りたいと思い出掛けた。猛暑の中エアコンをきかせて気分良く、手取川ダムや少々黄色にそまつた田畑を見ながら一路三ツ谷へ向かった。金沢を出たのが10時過ぎで、三ツ谷に12時ちょっと前に着いた。筆者は独りで採集に行くことが少なく、いつも2、3人といたグループで採集に出掛ける。この日もヒンクラ氏と一緒にであった。白峰から三ツ谷への道は幅も狭くカーブも多いという理由で、初心者マークの筆者は運転させてもらえず山岳路のエキスパートドライバー ヒンクラ氏に交替をよぎきなくされた。筆者自身は運転しなかったのであるが。

三ツ谷に到着してまず柳の木を探して道路とは対岸に渡り、柳の枝にいるクワガタを目を皿の様に探した。柳の枝のクワガタを探すのに夢中になっていたのも、足元を見る余裕が無かったのかもしれないが、下をチラッと見たとき何と蛇(真虫=マムシ)がニョロニョロはっていた。これにはさすがに驚いてしまい声も出なくなってしまう。蛇が近くには採集に集中出来ない、採集ネットの竿で蛇を川の中に飛ばしてしまった。対岸の柳にはクワガタの数

が少なく、4 cm 程度のアカアシクワガタが2～3頭ちらほら目に付くだけであったので、普段ポイントとされている場所へ移った。いつもは見逃す道路から少し奥に入った柳も探したためか、5 cm 程度のアカアシクワガタを5頭採集出来た。久し振りに大物のアカアシクワガタが採れたので、10頭採れた時点で採るのは止めにして、大物のオスのアカアシクワガタに見合うようなメスを探してみたものの大物のメスは少なくなかなか採れなかった。帰りがけに車で徐行していたところ、スミナガシ1頭が採集できた。

帰りは157号線も空いていたので思わず制限速度を30km程度越える事が何度かあった。ウインドウから見える田畑は少し黄色味を帯びて大変奇麗だったので、鶴来町小柳で事のついでに北陸鉄道石川線の写真を撮っていた。するとヒンクラ氏が何やらネットを持って畑の中をウロウロしているので、3枚程度撮ったところで行ってみると、ウラナミシジミがいると言って採集していた。最後に採集品と目撃した種を列記しておく。

1984年8月15日 白峰村白山三ツ谷

スミナガシ	1ex
アカアシクワガタ	10♂♂2♀♀
コクワガタ	1♂1♀

(目撃) ミヤマカラスアゲハ、キアゲハ、アゲハ、キチョウ

1984年8月15日 鶴来町小柳

ウラナミシジミ	4♂♂
イトトンボ	1ex

(目撃) キタテハ、ゴマダラチョウ、モンキチョウ、カラスアゲハ

図々しい俺

大島 國雄

ある日、上高地での出来事。

あわよくば、オオイチモンジの幼虫でも採れんかなと小梨平辺りをフラフラ散策していたラーメンヤのケンちゃん。「スミマセン。ちょっと教えてくださいませんか。ドロノキってのはどんな葉っぱをしているのですか？」と上高地自然保護センターの職員に声をかけた。その人はなんぞげに「ドロノキはね。その辺りの……」と説明をしかけてハッと気がついたのか、「ドロノキを調べてどうするのかね」と不審の眼差しをむけた。「そこに貼ってあるパネルにオオイチモンジという蝶はドロノキに発生すると書いてあるんだけど、どんな木かと思ひまして……」

しかしウヤムヤにごまかされてしまった。僕は今以てドロノキというのはどんな木なのかわからない。

ヒメオオクワガタが石川県に棲息することが報告されて以来、数多くの個体が石川県白峰村湯ノ谷、大杉谷林道で採集確認されている。本年(1984)尾口村岩間丸石谷において、多数のヒメオオクワガタを確認したので報告する。

8月20日単独で丸石谷林道をかなり奥までつめ、路上にとまっているキベリタテハを採集したりしていると、道沿いに多数のヤナギがあることに気付いた。白峰村の湯ノ谷や三ツ谷では、ヤナギに多数のクワガタがいることを思い浮かべ枝を捜してみると、アカアシクワガタとヒメオオクワガタが静止しているのが見つかった。湯ノ谷では谷側に張り出したヤナギの枝にいたため継なぎ竿で採集した記憶があるが、ここではヤナギが小さく短い竿で十分に採集することができた。比較的大きな個体だけを採集したが、かなり個体数も多いようであった。湯ノ谷方面では県外からの採集者も入り込んで、ヒメオオクワガタが減って来ているという話を時々聞くが、丸石谷にはまだ採集者があまり入っていない様子だった。

切り出したブナの木が並べてあるところがあったので捜してみたところ、ヒゲナガゴマフカミキリが多数いたが、オニクワガタは見つからなかった。またかなり汚損したクジャクチョウ 1exをネットしたが、比較的記録が少ないようなので記しておきたい。

データ	1984年 8月20日	石川郡尾口村岩間丸石谷林道
採集	キベリタテハ	1♀
	アカアシクワガタ	1♂
	ヒメオオクワガタ	5♂♂2♀♀
目撃	ツマジロウラジャノメ 1ex、	ヒメキマダラヒカゲ、
	クジャクチョウ 1ex、	アカタテハ、
	サカハチチョウ、	ルリタテハ、
	ミドリシジミ、	ルリシジミ、
	ミヤマカラスアゲハ 1♂、	キチョウ、
	ヒゲナガゴマフカミキリ	アサギマダラ、
		多数

1984年 8月15日 晴れ 国道19号線から国道 361号線へと乗り入れて、落合橋から樽沢を経て西野峠を越えたのが夕方5:00をすぎていた。地蔵峠からは明日の必勝地、開田高原が広がっていた。

前の日は長野県産ベニモンカラスシジミで有名な南信濃村和田へ卵採りの目的で沢筋を探すも、途中岩場でクロツバメシジミの採幼をしたりで不作の8卵に止どめ、次ぎの目的地シラビソ高原へと車を走らせた。シラビソ高原は国道256号線から蛇洞林道を利用して小1時間程登った尾高山(2212m)と御池山(1900m)の中間点で、標高1830mの位置にある。蝶相は信州クラスの人気版といった具合で、林道をミヤマカラスアゲハが飛び、ヒヨドリバナにはベニヒカゲとヒメキマダラヒカゲ、アサギマダラ、スジボソヤマキチョウが吸蜜にきていた。数は標高を上げるに従って特にベニヒカゲは、顕著に増える様である。

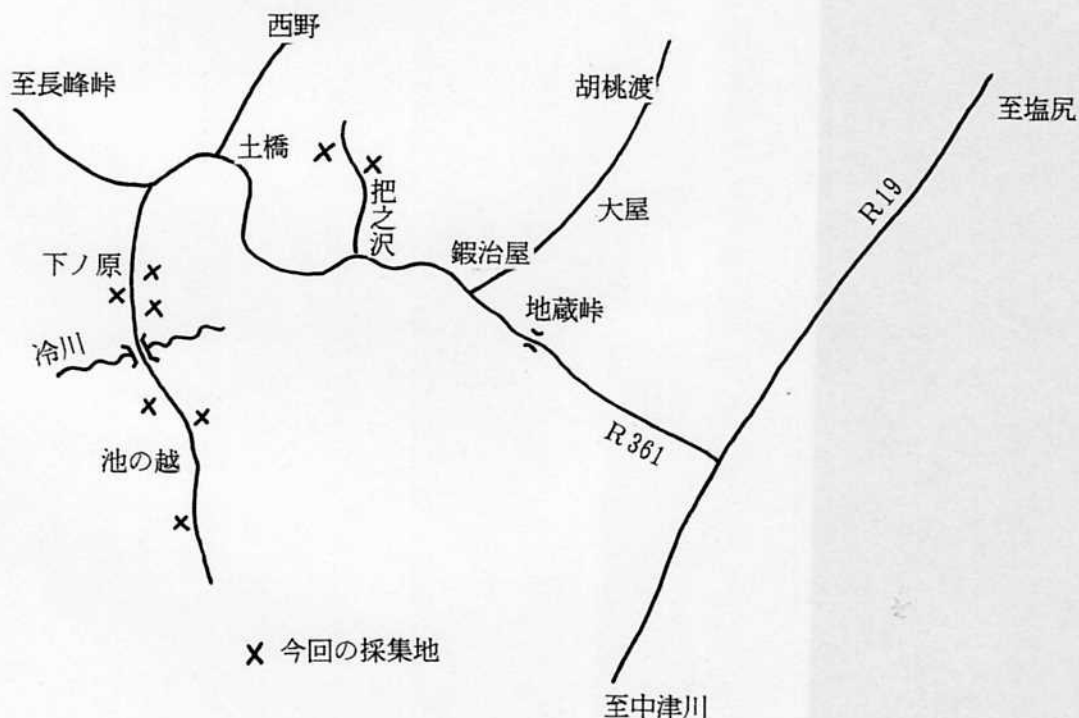
話が少し前後してしまっただが、西野峠から西野部落で宿をとり明日にかけの事にする。翌16日も高原の朝露を早くも乾かしてしまう程の晴天であった。西野から把之沢(タバノサワ)へとチャマダラセセリのポイントへ向かう。把之沢部落を経て左側の草付きでキジムシロが多く自生しているのを見付け丹念に探すもチャマダラセセリを見る事すら出来なかった。アカセセリとスジボソヤマキチョウそれに部落内のスモモとウメでオオミスジ♀を数頭採集したにすぎなかった。第2ポイントである下ノ原へ今度は転戦してみたが、ここも別荘地の空き地にワレモコウが多く自生しているぐらいで、ゴマシジミ、チャマダラセセリは見る事も出来ず。ヒットらしいヒットがでずままに下ノ原～池の越間で車を止めて徒歩採集に切り替える。というのも池の越と下の沢までは、結構草原や狭い草地そして休耕田がポイントとなっているので、歩いた方が見落としが無く有効である。案の定ワレモコウ、キジムシロ等のある草地を見付けることが出来たし、とくにマツムシソウがそこはかとなく咲いており絶好のポイントであった。マツムシソウは、山地性タテハ、特にクジャクチョウがこのんで吸蜜する他、アカセセリ、スジグロチャバネセセリ、コキマダラセセリ等セセリチョウに人気がある様だ。アカセセリがかなり多産しているのと、ゴマシジミも5～6頭程とヤマキチョウが少ないながら発生していた。がしかしチャマダラセセリは目撃すら出来なかった。

いい加減同じ蝶を採っていても仕方が無いので、メスアカミドリシジミの卵探しを30分程するも、12卵程昨年(84年度産か?)のフ化殻と寄生卵、無精卵を見付けたに止どまり、有精卵が採れず。完全に“つき”から見放されているとしか考えられなかった。アカセセリは確実にヒットしたがチャマ様は未だお出ましすら無く、今回の断念組にゴマシジミとともに入れようかなどと頭の中でふっと思った瞬間、キジムシロの葉上で翅を広げて止まっている♀を確認した。慎重にネットをかぶせてやっと目的のチャマ姫を採る事が出来た。となれば負け惜しみで春は発生数が多く、夏はかなり発生数が少ないと書こうと思ったが書かずにすんだ。事実夏はかなり少ないというのが定説だが…。一応の成果を挙げ帰路についた。

成果 長野県南信濃村和田 1984年 8月15日
 クロツバメシジミ 12exs(羽化7♂♂2♀♀) スミナガシ 1ex
 ベニモンカラスシジミ 8卵

長野県上村シラビソ高原 1984年 8月15日
 スジボソヤマキチョウ 10♂♂ 3♀♀ ヒメキマダラヒカゲ 3♂♂
 ベニヒカゲ 29♂♂12♀♀ ミヤマカラスアゲハ 2♂♂

長野県開田村開田高原 1984年 8月16日
 ヤマキチョウ 2♂♂ 1♀ スジボソヤマキチョウ 7♂♂2♀♀
 アサギマダラ 2♂♂ 1♀ エゾミドリシジミ 1♀
 ムモンアカシジミ 目撃 ゴマシジミ 数頭目撃
 オオミスジ 7♀♀ ギンボシヒョウモン 1♀
 アカセセリ 38♂♂14♀♀ チャマダラセセリ 1♀
 コキマダラセセリ 2♂♂ 1♀



人生これだけ来るといろいろな不思議な事があった。どうして若い時、女性は女神かと思えたのか。どうして子供の時、大人は頼りになる偉い人達だと思えたのか、等々多々あるがここには虫に関するもの三つをとりあげて記してみる。

第一話 大学生だった頃、八ヶ岳にタカネヒカゲがいると読み、出かけことがある。八つの峰々をまわった。初めの年は北の方から天狗、硫黄、横と歩いた。夕方赤岳石室に向かって歩いていると、硫黄と横の鞍部で側のハイマツからうす汚ない蝶が飛び出したが、すぐ強い風に飛ばされていったのがチラッと見えた。しかし早朝から登りづめで疲れていた事もあり、その時までタカネヒカゲを写真でしか見た事がなかった事もあり、そのまま見過ごし小屋へ急いだ。次ぎの日、主峰赤岳より本で読んだとおりガレ場を探しながら阿彌陀岳にかかった。急な道を“あー、きついな”位言って登った。(昔は馬力があったなあ。)しかし、そこにもいなかった。飛んでいたのはキアゲハ位。だが快晴。しかも頂上にいる。南アルプス、中央アルプス、乗鞍、槍、白馬と一望の下。写真でも撮って帰るかパノラマに写した。さて記念に自分を入れてと、そこにいた人に頼みカメラを渡した。そこには何体かの座像が南の方をむいて祭られていた(昔の信仰登山の名残なのだろうか)。これは丁度良いアクセサリだと東にむけ、“OK”と言う。カメラを構えた人が“そんな事して良いんですか？”と咎める。“イイヨ、イイヨ、大丈夫”とポーズをとった。だがなかなかシャッターが降りない。ボタンが動かないと言う。確かに押せばいいだけにして渡したのだから、そんな筈はないと思いながら受け取ってみると、押しても引いても動かない。気のせい何か何かに“フッ”と吹かれた様な肌寒い感じがした。その頃は若気のいたり、神も仏も何かに頼らねば生きていけない弱い人達の考えだしたものだと、そっくりかえていた僕も事によるとタタリと言うのも本当にあるかも知れないと思い始めた。帰りの急坂は慎重に下ったのを憶えている。結局その年は見つけられず、次の年、妹と登った折やはり前年見た地で、ガレ場でなくハイマツ帯に生息しているのを見つけた。

例のフィルムには現像してみると、何か稲妻の様なのが写っていた。

アーコワ、タタリジャー。虫を殺しすぎるとタタリがあるぞう。もう二、三人タタリを受けた奴等がおるだろうが。

第二話 オオイチモンジをねらって北海道は丸瀬布へ行き、湯川ぞいの林道を歩いていた時の話。オオイチの君は林道に入ってすぐの湿った所に降りていた。そっと近づくと飛び上がった。初めて見るあこがれの君の飛翔はまるでアサギマダラのようにフワフワ飛び、イメージしていた力強いはばたきではなかった。その個体は滑空を繰り返しながら高い樹の上へ昇ってしまった。歩いて行くと道に降りている。遠くから見ると三角の石が落ちている様で、そっと近寄っ

て網をかぶせる。(もちろん本物の石もあり何回もだまされた。しかし数回往復すると石の形、場所を憶えてしまうから人間てのはすごい。) キツネの糞にもとまっていて蝶と一緒にすくいこんだ事もある。奥に製材所があり、時折地響きをたてて、ダンプが走ってくる。他に数組の虫採りグループが入っていた。(皆東京から来ていた。その時初めて赤い網を見た。僕のは黒、蝶に見つからない様に。) それ等の間隙に降りているのを採るのだから多くない。初めての北海道、それも山奥で笹がガサと鳴れば熊かとビクビクしながら歩いていた。途中に崖があり、そこへ踏跡があるので入ってみるとエゾノキリンソウが生えている。探してみると、ところどころに食痕があり根元にジョウザンシジミの終令幼虫がうずくまっていた。ミヤマカラスは林道をまっすぐ飛んで来る。楽しい所だった。午後遅かったし、充分奥まで来たし、一休みしようかと側の石を見ると湿っている所にオオイチが二頭水を吸っている。網をかまえ近寄ると両方とも飛び立ってしまった。気を落ち着かせながら見ていると一頭は15m位先の道にとまった。と向こうからダンプがやって来る。片手で止まってくれる様に合図をしながら近寄り網をかぶせる。運チャンはニヤニヤしながら通りすぎた。もう一頭はと見ると、今の車に驚いたのか飛びたつてしばらく滑空していたが、やっと川の中州に降りた。皮の登山靴をはいていたがそのまま水に入り“ヤッ”とばかり伏せる。net in! 四頭目。ようよう上ずっていた息も落ついてきた。さて帰るか満ち足りた気分です歩きだした。夕方の林の中の道はほの暗く、そこを一人で歩いてゆくのはなかなか良いものだった。フトみると先の方から白い大きな蝶が飛んで来る。エゾシロだ。始めは物めずらしく皆採っていたが、いくらでも採れるし、三角紙を汚すのでいささか食傷気味だった。しかしその近寄って来る奴の飛び方は重そうな番っている時に見られる飛び方だった。一度に雌雄が採れるならと網を振る。もちろん net in。網の中を見ると雄一頭しかいない。おかしいと思ったが三角紙につつま、網を裏返そうとすると底にミスジチョウが元気なくとまっている。採った記憶も無いのに妙だなど思いながらも包み、ケースに入れた。その時はそのまま足を早めて宿へむかった。そのシーンを時を経て考えてみると、確かにあのエゾシロの飛び方は水平でありあまり波うたず、重そうだった。又僕は網にゴミをひろっているとまずいので、振ったあと必ず裏返しにしている。だからあのミスジがエゾシロの前に入っていたとは考えられない。又エゾシロが脚に何かをつかんで飛んでいた様には見えなかった。(その頃はまだ眼が良かった。最近の高速写真でも飛んでいる時、蝶は脚を開いている。) これ等の事から今ではあのミスジチョウはエゾシロと番っていたのではないかと考えている。網の底で弱っていたのも、余りの事に彼女(?)は気を失う程に動転していたのではないかとも思える。そのミスジチョウが雌ならば一つのデータなのだが、標本は何処かへいってしまい分からない。北海道へ行った人は実感して知っているだろうが、エゾシロの雄の性欲はもうメチャンコに強烈で、雌が拒否反応を示していても乗りかかって行くし、又番っている横から他の数頭の雄が来て俺も入れるとバタバタ騒いでいるシーンは良く見られる。見ている方の顔が赤くなる位だ。

しかしそれ程の雄の衝動があって、やっとなんか種族が保たれているのかと思うと、あながち我ら雄共の衝動を悪く言う事も出来ない様に思える。でもそれは食う事、出す事と同様、もしくはそれ以上の生の根源の問題なのに何で道徳とかであれほどまでに押さえつけるのか、これも又不思議な話である。

第三話 昭和58年暮、東京の弟よりお裾分けがきた。その中に広島県帝釈峽産のミヤマカラスジミの卵があった。枝はキビノクロウメモドキだと言う。Strymonidia のファンである僕は大喜びで大切に保管しておいた。前の年は金沢市横谷産のミヤマカラスジミを鉢植のクロツバラで飼って、幼虫の大脱走に困ったので今年はタッパーウェアで飼育する事にした。家の側のクロツバラの芽がふくらみだした頃、卵を冷蔵庫から出した。卵に穴が開き、幼虫が枝をはい始めてから容器に移し芽と一緒にした。今度は順調だった。幼虫が日に日に大きくなってゆくのはこの趣味の大きな喜びの一つだと思う。大部分が終令になろうかと言う頃、一頭がすでに前蛹になっているではないか。その形も何か平たく大きすぎる様に思えた。訳が分からないままその箱の中に入れておいた。残りが前蛹、蛹になり箱の中が淋しくなったある日フト見ると赤い蝶がいるではないか。アカシジミ！ 羽化不全で左の羽が伸びていない。又腹部より蛹殻もはずれていない。だが大きさは、まあまあだし成育は悪くなかった(右前翅長19%)。

あまりゼフに関心のなかった僕は(あんなのギン紙を並べた様なものだと言って、ゼフファンのCと良く論争した)一通りの飼育しかやった事がなかったし、飼育も上手くなかった。まず眼が良くないので卵探しが苦手だ。そんな事もあり、アカシジミの採卵、飼育はそれまで試みた事はなかった。卵殻は確認していない。もちろんその容器にはコナラ、ミズナラの類は入れていない。その年ブナ科を食す種は鳥越村阿手産のアイノ、ダイセン位だけだった。僕は金沢市錦町にアカシジミが発生して(ジョウザンミドリはいる)クロツバラに産卵に来たとは考え難いので、広島県の枝に着いていたと考えている。こうしてみると母チャンが産んでくれたからその樹の芽を食べているが、連中も大きな可能性を秘めているのではないか。

同じ事は人間にも言えるのではないだろうか、明治維新に活躍した人達はほとんど下層武士の子だと聞く。諸君も可能性にかけて大きく飛び出して下さい。同じ事は“翔”にも言える。より発展して下さい。とりあえず50号おめでとう。

凸凹採集記

中西朱美

読者の皆さん、こんにち。今回は会員の紹介と言う事で“どうしても原稿を”と言われ、仕方なくペンを執りました。マっしばらく頭を休めて笑って下さい。

主人がケガをしてから約1ヶ月がたちそういう生活にも慣れた頃、かねてから松井夫人と計画していたジャコウアゲハの採集に出かける事にしました。そして8月16日、最悪な1日の幕は切って落とされたのです。ジャン！朝8時までには松井宅でと言う約束に私は寝坊をしてしまい、目が覚めた時にはもう8時でした。着替えもそこそこに3人の子供を車に積み込んでそれ急げ、市内を80kmで走りやがて松井宅に…着くはずなのに、なんと私の車の前で旗を振る人が見えます。ガックリ。16kmオーバーの切符をポケットに松井宅に到着。「おはようございます。遅れてすみませんでした。」おそるおそる玄関をあけると、「寝坊して今起きたんです、もう少し待って下さいね。」あーショック。天気も良いので何とか気を持ち直して、行って来ます。車は一路目的地へと走り出しました。道を間違えながら10時過ぎには富来町酒見に着いたのに、ポイントが良く分からずにその辺りを約1時間もうろうろ、時計を見るともうすぐ12時、腹が減っては戦は出来ぬ。すぐ近くの食堂に入る。ポイントの確認をしてポイントに何とかたどり着いて待つこと1時間、とにかく暑い日でした。ふっと後ろを見ると、黒い蝶が花に止まってヒラヒラとしています。やっとお目見えです。まず1頭は私が採りました。日中で暑いせいか余り数が来ません。でもここまで来たからには1頭でも多く手に入れたい。成蝶を手に入れるには、まさしく“待つ”の一言につきる…とつくづく感じました。

戦う事4時間、2人でどうにか6頭を手に入れ時計を見るともう4時すぎ、子供達もそろそろ飽きて来たのか、「ハエが多い」「つまんない」を連発。もう少し頑張りたかったのですが、あきらめて近所の家で水道を使わせてもらい、手や足を洗って（私はゾウリを履いていたのでホコリで真っ黒）さっぱりした所で酒見を後にして、次ぎの目的地羽咋市芝垣海岸へ。ここには珍しいハンミョウが居ると松井夫人がハッスル ハッスル。せわしなく動き回るハンミョウを追いかけて、エッチラ オッチラ… 全くタフなのです。その間子供達は海水浴。私は車の中でダウン。くたびれてしまって動く気もしませんでした。夕日の沈むのを見て、さあ家に帰りましょう。もうそろそろ金沢に着く頃になると今度は子供達が、「のどがかわいた」「おなかがすいた」それでは何処かでジュースでも… おっとっと サイフが見当たりません。車の中の何処かに有るはずなので、とにかく食事をする所まで行ってゆっくり探す事にしました。でもサイフは有りません。仕方無く食事代を松井夫人に出してもらい、主人にそんなこんなを報告。がっかりしながら夜はもんもんと眠れせん。「よし、明日はもう1度酒見へ行ってみよう。サイフも何処かに落ちて居るかも…」

次の日の朝、今度は1人で酒見へ向かいました。道も間違えずに10時半に到着。昨日より時間が少し早かったので、昼までに5頭立派な♀も手に入れました。昼食時にはサイフを捜してみましたが、やっぱり有りません。仕方無く富来の警察に届けを出してポイントに戻りボサーっと待っていると、後ろから声が聞こえて来ました。昨日、水道を借りた家のお婆さんでした。それからその

おばさんといろいろ話をし、水入りのお茶までごちそうになり、帰りぎわにはお土産（そのおばさんが毎朝すぐ近くの海岸を散歩しながら拾い集めた桜貝等の貝殻）をくれて「来年も又おいで」って。人の触れ合いっていいもんです。で、その日は7頭のジャコウを持って、来たときよりずっと元気になって家に帰って来ました。そしてジャコウを見るたびに、その日有った出来事をほのぼののと思い出しています。

でも良く考えてみると、私はいつも何処かへ行くと必ず何かドジをやらかしています。だから自分で採った蝶を見ると、ああ…あの時はといつも笑っています。ドジの中でもジャコウ採集は NO. 1、全くジャコウは高くつきました。でも蝶の採集は楽しいです。皆さん、頑張りましょう。それでは凸凹採集記これで終わります。

記念号 オメデトウゴザイマス

小 幡 英 典

記念号、オメデトウゴザイマス。

会員全員の原稿で、記念号を飾ろうという事で私にも原稿の依頼がありましたが、残念ながら書く情報がありません。ゴメンナサイ。伏してお詫び申し上げます。

幽霊会員を自認する私といたしましては、会費をしっかりと収め、会の名を汚す事だけはないように配慮しながら、次回の記念号に参加する榮譽が与えられる事を願っています。

今年はギフチョウの交尾に出会えたらと考えています。いろいろと教えていただく事もあるかと思えます。その節はどうかよろしく。

蝶 を 撮 る

田 辺 幸 雄

ファインダーの中で蝶が舞う姿は肉眼で見るとよりも何倍か美しいものです。それはカメラによって自然の一部分を切り取り、さらにその一部分をクローズアップするのですから当然かもしれません。接写には、ピント、フレーミング、露出、バック等色々神経を使うことが多いのですが、美しい蝶を生きたまま自分のものにできる喜びは何ものにも変えがたいものです。

しかしそれは、スライドになって手許に来たときに初めて言えるのでありまして、実際にはシャッターを押すのが精一杯で、美しさに感動している余裕などにはあるはずも無いのが今の私です。

原稿、原稿とうるさい人がすぐ身近にいるので、気が向かないながらペンを執ったのですが、さて何を書いて良いのやらさっぱりなのであります。そう言えば姓が変わってからというもの一度も“翔”に載った事が無いはず。あれから約2年いろいろな出来事がたくさんあり、採集についても書きたいものがたくさんあるのですが、いったい何から手を着けて良いのやら…。まあ今回は記念号という事もあって、またまたほんの“YODAN”に留めておいて、これを機会にぼつぼつと2年間の採集記録 - 中西夫人との楽しい思い出 - なども書いていこうと思っているのです。

年月というものはほんとに知らぬ間に過ぎて行くものだとしみじみ感じる今日この頃。振り返ってみると会に入って約6年、嵯峨井氏からの手紙を元に、百万石… “ああなんてグサイ名前なんだろう” と思いつつも、こんなに近くに同類がいたことへの驚きと感激と喜びで胸一杯にし、早速入会させていただいたのであります。あのころは会合にしても、今のワイワイ雑談会とは全く違ってほんとに静寂とした異様な雰囲気でしたから、人見知りする性格の私は皆さんの片隅で黙っているだけしかなかったようです。しかし思いやりのある嵯峨井氏が暖かく声をかけて下さった為、何とかついて来ることができました。かといってただぼんやりしていただいただけという訳でもなく、興味ある虫の話聞きながら案外皆さんのお顔の観察もしていたり、結構楽しい時間を過ごしていたのではあります。虫屋さんというのはたいてい無口で取っ付きにくい人が多いようですが、そんな中に一人だけ異常なほど良くお口の動くオモシロ青年がいたことが特に印象に残っています。彼は今でもお口の方はいっそう発達しているようであります。また片隅でおとなしそうにニコニコ笑っているメガネ青年の目をひそかに見つめ、“ああ世の中にこんなに小さな目をした人間が存在したのであるか” などと感心してみたり… そして今ではその小さな目もすっかり見慣れてしまうハメになってしまいました。おかげで“かわいそうなムシヤの夫” (翔NO.28) の心配は全く無くなったようなのですが、替わりに“かわいそうなムシヤの妻” が出来上がってしまったように思える時があるのです。小さな目の虫バカセは、明けても暮れてもムシムシ 妻の私には至って無神経なのですが、ムシを触る時はまず手を消毒してからという気の配り様なのです。

土曜の夜になるとソワソワ妙に落ち着きを失った虫バカセは、やたら電話器を意識しはじめるのです。夕飯を食べながら“疲れているし明日は家にいたいなあ、でも誘われたら困るなあ” などとブツブツ、全く心にも無いことをと聞こえぬ振りをしていると、やがて威勢の良いベルの音、相手はほとんどが二人のN氏なのですが、全くヨダレを垂らさんばかりの顔で話をしているのです。そして問題は仲良し迷トリオの話がまとまった翌日、日曜日なのであります。やはり主婦とやらになってしまうと、実際にも精神的にも時間制限され、ゆとりの持てない毎日になってしまうように思います。かつては朝5時に起きせ

フィリスを求めて毎日医王山まで走ったり、また何をしに行ったかは忘れてしまいましたが、はるか富山県の早月川まで一人で出掛けて行ったスーパーギャルのヒロコではあったのですが、最近は日曜日位ゆっくりしたいと思うようになってきてしまったのです。にもかかわらず虫バカセときたら、まるで遠足の朝を向かえたワンパク坊主をかかえているようなもので、まだ薄暗い内からドタバタ ドンドン ドクターン やれ朝ごはん それオニギリ と私を心地よい眠りから離そうとします。そしてこれが毎週であるからたまったものではないのであります。そして間もなく迎いのクラクションの音。楽しそうに飛び出して行く姿を見送りながら、やれやれとため息一つ。

しかしその後シーンとした家の中で一人、いい年をしたおじさん三人のドタバタスキーやずっこけ木登りを想像しながら、思わず笑いをこぼさずにはいられなくなってくるのであります。そしてフッと思ったりする。“あの人達からムシを取ったら一体何が残るのだろう…” 一日がかりでクタクタになって帰っても、どうせ収穫は期待するほどの物ではないはず。しかし彼等はそれを知って出かけて行くし、満足げにほんとうに幸せそうな生き生きした顔で帰ってくるのです。元々虫屋というのはあの美しい細い体にグサッと針を刺したり、愛らしい姿をそのままに冷蔵庫でカッチン（凍死させる事）したりということを、平気でやってのける残酷極まる人種のように見られているようですが、本当はムシを自然をひたすら愛する心優しい者なのであります。ですから採集に行くなどと威張って出かけても、案外ただ山の中をフラッと歩き、道端で虫たちに声をかけたり、ただポケッと彼等の行動を眺めてみたりするだけで、結構満足して帰って来る場合があるのでは？

もちろんこれは私の考えであって、いろいろなタイプの虫屋さんがいらっしゃるようで… やたらネットに入れたがる方、針を刺したがる方、ひたすら箱の数ばかり増やしたがる方、飼育地獄に追われることに快感を覚える方、いじくりまわすのが好きな方、展翅に生き甲いを感じる方等様々なようですが、けれども私はいずれの虫屋さんも標本というものにこだわる以前とにかく一緒に時を過ごしたい、彼等を眺めている事が出来ればそれでいいというのが、ほんとうの気持ちなのではないか思うのです。標本作りというのは、本当の意味でそれがかなえられないためのやむを得ない手段に過ぎず、もし美しい蝶たちが常に自分の回りを取り巻き離れないでいてくれたら、だれが針を刺してハリツケになどするものですか。私は近ごろ標本箱の中の蝶を目にして、なぜだか異様な空しさを感じるのです。よく考えればただの脱け殻にすぎないその蝶たちが妙に惨めでならず、苦心して取った思いで深いものさえも、何の価値も無いように思えてきたりするので。それは私が虫屋であって、皆さん同様本当の蝶の美しさを知っているからでありましょう。蛹を破り初めてこの世の空気に触れたあのみずみずしい羽の美しさ、更にか細い体の隅々まで被う鱗毛一本一本の美しさを、あるいは野山を軽やかに飛び回るあの活発な姿を、そんなすばらしさを知っているからこそ箱に並べられた脱け殻たちは、私の目に何の魅力も残さずそればかりか空しさばかりを感じさせるのです。わたしが虫屋で

なければ蝶たちを単に物質的に捕らえる事ができるでしょうから、美しい箱に美しく並ぶ蝶たちを、まるで貝殻細工の素晴らしい額縁でも眺めるように、うっとりときみつめるに違いありません。そんな人達はあのモルフォ蝶など数多くの羽をもぎ取って作ったモザイクの額飾り（皆さん御存じだと思います）を、同じように美しいと思いうっとりときみめるに違いありません。私はあれを見ると思わず目をそらしたくなるのです。美しい羽をもぎ取られた蝶たちの体部分だけが山積みになっているのを想像し、ゾッとするのは、

そういえば幼いころ私は蝶を採る事をたいそう悪い事のように思っており、遠慮しながら採集していたようでありました。幼いながらに同じ場所で同じ種は、1ペア以上採らないという固い信念を持ってそれを強く守っていたようです。そしてそれがあたり前の事で、だれでもそうしているように思っていました。ですから標本箱もいたって貧弱であり昔ながらのコルク敷きのインロー型に、様々な種類の様々な色、大きさの蝶たちがやたらに並べられていました。今のように美しい木目の縁取りに真っ白なバック、ゆとりのある場合は何処に空間を置いたら美しいか、どの種を組み合わせたら良いかなどと、装飾的なバランスまで考えたりするそんな数も種類もなかったし、ましてそんな事はどうでも良かったのです。一つ一つが美しければそれで良かったのです。そして一つ一つが大変貴重であり愛情にあふれ、他人に見せるのももったいないような、大切な自分だけの蝶だったはずです。今では、貴重なのは数少ない種類だけに過ぎず、同じ産地の同種類のもものが多く並べられていると、一つや二つ人にあげたって何とも思わなくなってしまうました。そんな蝶たちを思うとかわいそうでならないのです。大切な“命”というものと引き換えに、この箱の中にいるのだということを忘れてしまえば、あまりにも申し訳ない事のように思えるのです。

こんなことを書いていくと“いったい何が言いたいのだ”とジロリとにらまれそうな気がします。ただ私は、目の前を雄々と通り過ぎていくオオイチモンジをニッコリ笑って眺めているとは決して言いたくありません。しかし何十、何百とゼフィルスの卵や幼虫をタッパーに詰めて持ち帰り、いったい何をするのでですか。晩のおかずのつくだ煮にしては余りにも貧弱すぎる！ しかも毎年同じ場所へ出かけ今年こそはもっとたくさん！ と張り切り、まして多人数で出かけたりすると、競争心などという厄介なものに囚われたりし始めるのです。多くの卵たちはやがてさも親切そうにエサを与えられるのですが、行く末は冷蔵庫でカッチンなのであります。“それならばブナやミズナラの上で小鳥につつかれた方がまだましです”と蝶たちの声が聞こえてきそうな気がするのです。それで自然のバランスは保たれているのかも知れないし、採る事に楽しみを感じているのならそれで良いのかもしれませんが。けれども価値の低い標本を、これ以上並べてほしくないのです。たぶん数が増えるほどに、それらはどうでも良いものになっていくのですから。

極度な心配症の私は、この年令でもう老後の事まで考えたりするのですが、私達夫婦の後、標本の管理はどうなるのだろうと真剣に悩んだ時がありました。

しかし近ごろは、それも成り行きまかせと気軽に考えております。やたら数多くの標本よりも、もっともっと素晴らしいものを残したいと思うからでしょう。

“翔”も50号となり、これからも益々成長しつつあります。そして100号さらに“蝶談会 50年 おめでとう”と言えるように、若い方にだんだんと引き継いで行ってもらう事が理想であります。しかしそれができずとも、せめて蝶を愛し、大自然に感動することのできる素晴らしい心だけは絶え間なく子孫へ、またその子孫へと是非とも受け継いで行ってもらいたいものであります。

今、私も“虫バカセは困る”などとブツブツ言いながらも、腹部に微かな胎動を感じながらいずれ「虫バカセpart 2」が出来上がる事をひそかに期待しているのであります。

追記 とりとめのないほんとにYODANで申し訳ございません。大切な事を忘れました。まずは“翔 50号 おめでとうございます”そして虫バカセさん、毎日ワープロとの大格闘さぞ小さなお目々は疲れた事でしょう。ほんとに御苦労様でした。そしてそんな虫バカセに素晴らしい原稿と共に協力して下さった皆様、ほんとにありがとうございました。これからも益々“翔”の内容を楽しいものにしていききたいものですね。頑張りましょう。

フ化率を上げる採卵法

松 井 正 人

せっかく苦労して採集してきた卵がかえらない事があって良いだろうか、しかも1卵しか採集出来なかった卵が。こんな経験をして涙を飲んでいる時、更に追い討ちをかけるがごとくイモ扱いされたときの辛さ、なぜフ化しないのか深く悩みの底へ落ち込んでしまった経験が君にもあるだろう。卵の管理には自信があった。フ化法にも自信があった。しかしフ化率が悪い。

ヒントはコムラサキの越冬幼虫にあった。越冬中のコムラサキの幼虫を暖めて動かしてしまうと、翌春の飼育がうまくいかないのだ。卵も翌春までに暖めてしまうとフ化率が落ちるのではないだろうか？ そういえばこれまで、採集した卵はシャツのポケットに入れていた。体温36°C、きっとこれに違いない。

1983年の採卵は、勝見氏に教えてもらった採卵ケースを中西重雄氏とお揃いで購入し使用したところ、1984年のフ化率は見事に上がったのである。これまで50%程度だったフジミドリのフ化率が 24/25なんと96%になったのである。これはほんの1例で、他にも色々飼育しそのすべての種においてもフ化率は上がったのである。

フ化率を低下させていた原因は既に採卵時にあったと思われ、採卵時に卵を暖めない事がフ化率を上げる事につながると思われる。しかしながら、卵の管理やフ化法もフ化率を大きく左右するので、ただ単に採卵ケースを用いたからといって単純にフ化率は上がるものではない。

松田俊郎氏による石川県のムモンアカシジミの再発見(1)は1984年の最大のニュースであったばかりでなく、百万石蝶談会6年の歴史における最も画期的な出来事だったと思う。何しろ最初からムモンアカを採集するという目的を持って、8月のクソ暑い中、たった1人で、過去の記録とは全く無縁の、オロロのまわりつく谷に入り、3時間以上も捜しまわってやっと発見したというのだからすごい。フジミドリシジミの採卵に行ったらたまたまクロウメドキがあったので見るとミヤマカラスシジミの卵が着いていた等という単なる偶然とは全く比べ物にならない偉業であり、「採れるかどうか分からないものを1人で捜すのは消耗だから」と徒党を組んで調査に出掛ける輩とは(含、筆者自身)、そもそも心意気からして違う。この発見はただだ氏のむし屋としての実力(情熱+知性+体力etcの総合力)によるものであり、心から敬意を表したい。実は、筆者の見るところ我蝶談会にはこの発見を松田氏の代わりにしたとしても不思議でない実力を備えたむし屋がもう1人いたと思う。その人は中西重雄氏で、氏は昨春から「今年は少しムモンアカを捜してみようと思っているんですよ。」とのたまわっていた。氏の迫力を知る者にとっては、氏の「少し捜す」はそこらのイモが10人集まって必死に捜す以上の重みを持っているのだが、残念な事に氏はそれまでの余りに激しい採集活動が神の怒りにふれてか、今年の6月仕事中に骨盤骨折をされ、松田氏の快挙が成し遂げられた時には整形外科のベットに横たわっていたのである。それはともかく松田氏による発見は容易にムモンアカの採卵へと結び付き、この時点で石川県のゼフ採卵は一応の区切りを向かえる事ができた様な気がする。翔が50号に成った機会に、蝶談会6年間におけるゼフ採卵史を振り返ってみたい。

百万石蝶談会が結成された1978年より前の石川県のゼフ採卵史となると、筆者はほとんど知識を持たないが、石川むしの会の「とっくりばち」を見ると、1970年代前半には時国建太郎氏がウラクロシジミ、ウラナミアカシジミ、ウラゴマダラシジミ、オオミドリシジミの採卵記録を発表している。(2,3) 同氏が発表はしないものの他の数種のみズナラ食いのものをも採卵していたことは想像に難くないが、不幸なことに氏の採卵技術は我百万石蝶談会のメンバーには継承されておらず、結成時のメンバーは誰1人として上記4種について採卵経験を持つものは無かった。当時我々が採卵出来たのはジョウザンミドリシジミ、アイノミドリシジミ、ミズイロオナガシジミ、アカシジミ、エゾミドリシジミ?のみズナラ食いの各種と、ミドリシジミ、フジのみであり、それもミドリとジョウザンを除いては1日に数卵得られる程度のものであった。ウラゴマやウラキンシジミ、オナガシジミ等については成虫が採れているのだから卵も捜せば採れるかも知れない等と話し合われていた段階だったし、メスアカミドリシジミやムモンアカの採卵など誰も考えもしなかった。それが6年もたった今シーズンは、ゼフの豊産の為もあるとはいえ、メスアカ100卵、ウラゴマ400卵、フジ80

卵(いずれも1人1日で)等々、景気の良い話が飛び交う様になっている。この間の蝶談会内部における採卵技術の進歩を各種毎にみると表の如くなる。これは採卵状況を3段階、

1)記録された (1人1日で1卵以上得られた)

2)普通に採れた (同、20卵以上得られた)

3)沢山採れた (同、100卵以上得られた)に分け、何時、誰の手によってその段階への進歩がもたらされたかをまとめたものである。この3段階分類については、1の「記録された」はともかくとして、20卵とか100卵とかにどんな意味が有るのだという疑問を持つ方も多いと思うが、筆者は20卵というのは「単なる偶然ではなく、ある程度その種を目標に採卵が出来る」かどうかの、100卵というのは「その種の産卵習性等の理解が進み、いわゆるポイントをつかんだ採卵が出来る」かどうかの判断点としてとらえている。もちろん他の地方でゼフの採卵に習熟した人が石川県の山に飛び込めば、多くの種についていきなり100卵以上の成果を上げる事も困難では無いだろうから、ここにまとめたのは百万石蝶談会内部での採卵技術の進歩、つまり極めて個人的な記録であることを明記しておきたい。

	1 (1卵以上)	2 (20卵以上)	3 (100卵以上)
ウラゴマ	松本、野中(1978、5)	井村 (1978、未)	野中、他(1981、未)
ウラキン	野中、松本(1978、5)	野中 (1980、未)	
ムモンアカ		松田、他(1984、未)	
アカシジミ	?		
ウラナミアカ			
オナガシジミ	松本、野中(1978、6)	野中、嵯峨井(1981、7)	?
ミズイロ	?		
ウスイロ	?		
ウラミスジ	?	勝海 (1983、未)	
ウラクロ	?		
ミドリシジミ	?	?	?
メスアカ	野中(1980、8)	吉村久 (1982、9)	勝海(1984、未)
アイノ	?	松井 (1978、10)	
フジミドリ	?	入場、他(1978、11)	
オオミドリ	?	野中 (1981、12)	嵯峨井(1984、未)
エゾミドリ	?	勝海 (1984、未)	
ジョウザン	?	?	?

表中、?はその記録は確実に存在するが古すぎて又は多数有りすぎてどれが最初か決定出来なかったものである。各記録のカッコ内には採集年と文献を示し、「未」は未発表記録である。太線は現在の採卵技術のレベルであり、これが右はじに一直線になる様に会員各位の努力を期待したい。

この表をみて2~3気の付いた事を記すと、先ず人気のアイノが100卵ライ

ンに達していないのは、何とも残念である。石川県でも、「1本のミズナラからアイノ 100卵」という事は絶対に可能なはずだ。誰か頑張れー。ミズイロ、ウスイロ、ウラクロは各々10卵以上の記録は有り、20卵ラインに達するのは時間の問題だろう。特に卵塊産卵型のウスイロはポイントさえつかめばという気がする。意外にしぶとそうなのが、芽から幹まで何処にでも1卵ずつバラバラと産んであるミズイロだろうか？アカ、ウラナミアカを20卵ラインにのせるのはかなりの忍耐力を要求されそうである。さらに言えばムシ屋の実力の見せ所と言えるだろう。フジは大豊作の今年だめだったのだから、100卵ライン到着のチャンスはまた5~6年待たねばならないだろう。ウラミスジ、エゾにおける採卵技術の進歩は、勝海氏による京都文化(採卵の)の導入によるものである。エゾの技術は中西氏を経て会員間に普及しつつあり、既に能登の調査に威力を發揮している。

最後に富山県の事になるが、わが会のほとんど全員が採集している神通川のヒサマツについて簡単に述べてみたい。1979年、この地にヒサマツが産するという噂を聞き付けた井村正行氏は、降雪の中チェーンをまいて神通の谷に入り、見事採卵に成功した。(4) 以来蝶談会員がここを訪れなかった年はなく、たいていの年は2~3派に分かれて採卵に行っており、今や誰の標本箱にもこのヒサマツがズラッと並んでいる。従って井村氏の調査は他人に恩恵をもたらしたという点においては、蝶談会の採卵史上最大のものだったかもしれない。このヒサマツは数も多くて、又余りに多くの人々が訪れているので誰が最初に100卵ラインを突破したか明確でないが、1981年の筆者の230卵というのがそれにあたるかもしれない。今シーズンは中西・勝海組が2人で800卵という大戦果を上げている。

以上、専ら数に注目して書いてきており、分布調査至上主義の人々からは「ただ数を沢山採るのは意味がない」といった批判をうけそうである。しかし、分布表の○印よりも展翅された標本の方に美しさを感じる筆者にとっては、これはまさに決定的に重要な問題なのである。それに、他人から教えてもらわずに沢山採る為には、パイオニア精神と共に、そのムシの分布、生態等に関する総合的な知識が要求されることは明らかで、「ただ、数を採るだけ」という安直な批判は余り根拠が無いと思われる。

最後に、本文中の表を作るに当たって、多くの方々の未発表記録を使わせていただいたのでここに感謝の意を表したい。

文献

- | | | |
|-----------------|---------|--------------|
| (1) 松田俊郎 (1984) | 翔 NO.48 | 1~2 |
| (2) 時国健太郎(1972) | とっくりばち | NO.22-23 6 |
| (3) 時国健太郎(1974) | とっくりばち | NO.26-27 2~3 |
| (4) 井村正行 (1979) | 翔 NO.4 | 5 |
| (5) 松本和馬 (1979) | 翔 NO.3 | 5 |
| (6) 松本和馬 (1979) | 翔 NO.3 | 7 |

(7) 野中 勝・嵯峨井淳郎(1982)	翔	NO.27	2
(8) 野中 勝 (1980)	翔	NO.20	4
(9) 吉村久貴 (1983)	翔	NO.38	1~2
(10) 松井正人 (1979)	翔	NO.7	3~5
(11) 井村正行 (1978)	翔	NO.2	1~2
(12) 野中 勝 (1982)	翔	NO.31	2

1984年6月23日深夜のこと、工作中不覚にも骨盤骨折(全治3ヶ月)の怪我をしてしまった。季節も6月の終わりごろと言えば蝶のシーズンがこれからという時で、悔やんでも悔やみきれない時期でした。おかげで色々計画していたプランも台無しになってしまい1シーズンを棒に振ってしまいました。入院中体が元どおりになるのだろうか、仕事ができるようになるのだろうか、蝶採りが出来るようになるのだろうか不安で一杯でしたが、蝶仲間の励ましや女房の看護により、社会復帰出来た事を感謝しております。また入院中、野中勝氏などには私が蝶についてはまだまだ不勉強なので、いろいろ文献(TSU・I・S0等色々)を御貸し頂き退屈な入院生活を送らずに済みました。また松井正人氏にいたっては、今シーズンの情報等を逐一報告して頂き、度々御見舞い頂いた事、金子先生、勝海氏御両名に励ましの言葉を頂きまして誠にありがとうございました。翔紙上を御借り致しまして感謝し、御礼申し上げます。

さて退院後のリハビリですが足腰には歩くのが一番なので、9月22、23日には採卵を兼ねて山歩きでもしようと、まず木に登らずに済むメスアカミドリシジミでもと医王山白兀山へ出掛けたのです。山歩きだけだとすぐに疲れて余り歩けないのですが、蝶屋をやっていると卵という特効薬があるのです。小さな山桜や豆桜を捜して歩くうちに、いつの間にか白兀山の頂上に登ってしまったのです。登った以上は下らなければならず、ガンバって薬(卵)を採りつつとうとう重山分岐から白兀山、白兀山から重山分岐へと歩いて一周してしまったのです。健康な体でも重山分岐から白兀山のコースはかなりの道程だと思いますが、この時も足が棒のようになり、白兀山の尾根にて小休止した。ブナの小枝(地上1m位)からフジミドリシジミ2卵を得る事が出来た。このように蝶屋にとって卵の薬効は絶大なるもので、メスアカ1卵なら50歩、フジ1卵なら100歩位は歩ける力が沸いてきて先へ先へと歩けるようになるので不思議でたまりません。

このようにしてリハビリを行なった結果は、翔NO.48にも載りました採卵記録票を見て頂くと、回復度がお分かりになるでしょう。現在では十分採卵出来るような体になり、仕事も支障なく山スキーにも行ける体力がつかしました。リハビリテーションに採卵を活用したのがとても良く、速い体力の回復につながったのです。蝶屋をしていたおかげでこんなところで趣味が役に立ちました。

7月29日今日は盆踊り大会の日であり、燈火採集大会の日でもあり、白山小桜平登山の前日でもあった。

盆踊りの雰囲気好きな私は、その日妻を連れ本多町公園でアイスクリームを売っていた。なぜアイスクリームを売っていたのか定かでは無いが、固いアイスクリームを子供相手に100円で売っていた。私もユカタを着ていたので、時々妻と共にサノヨイヨイと踊っていた。この盆踊り大会にはコンテストがあって、良くは分からないが踊りはどうでも良いのか、盆踊り大会 NO.1 (Mr.ユカタ) に私が選ばれ、妻は優秀賞に選ばれた。参加人数は決して少なかった訳ではない。後で考えると妻の賞は分かる、しかし私の賞はどうもふに落ちない、1番ユカタが目立った(いかなる意味か?)人物に与えられる賞のような気がするがそんな事はどうでも良い。

9時頃盆踊りが終わり、残ったアイスクリームは半分子供にやって、残った半分は我々が食べ、急いで帰ってユカタを着替え、一路白山岩間温泉へ。そこには蝶談会の夜行虫共が。11時頃岩間温泉へ行く途中の見晴らしの良い道端で、ウツロな目で薄汚れたシーツを眺める異様な3人組に出会った。まだナマリ1個だと言っていた。異様な中に溶け込むのが怖いので、明日が早いからと早々に異様な3人組と分かれて岩間温泉へ。朝がとっても早いから温泉の人達に悪いので、そっと駐車場にテントを張って泊まる事にした。

翌朝は5時20分温泉駐車場を出発した。朝食は食べたか良く覚えていない。約1時間で半壊したヒュッテに着いた。今年(1984年)の大雪で半分つぶれてしまったようだ。おもしろいので中へ入ろうとすると、妻が止めた。ここからが登りである。妻が先にポコポコ登る。途中キハダの木が山道の上に倒れ掛かっている、先に行く妻がミヤマカラスアゲハの幼虫を採ったとはしゃいでいる。後を追って私もそこへ行くと、例の臭角より出る匂いがたまらなく臭い。妻が先を歩いているので、いつまでたっても臭角の匂いがする。きっと妻のリュックから漏れてくるのだろう。幼虫を入れたタッパーのフタがきっちり閉まっていないうちに違いない。妻に注意を促しても、臭角の匂いはいっかなひかないどころか、時々激しくなる。こんなにも強い匂いのものなのかと思い妻に尋ねるが、妻は全く匂わないらしい。妻の背中から私の方へ流れ出ているせいだろうか。臭い臭いと思いながら歩いていると、何やらグニャリとするものが手に触った。アレっと思って良く見ると、臭角を振りかざしたミヤマカラスアゲハの終令幼虫が胸にはっついていて、これでは匂はずである。この臭角野郎も妻のタッパーに納まってあの匂いは消えた。コエトを越える頃より妻の足どりが心なしか遅くなり、薬師山にやっと着いたのは10時20分であった。ここより小桜平は目と鼻の先である。ハクサンコザクラを楽しみに登っていくと、まだ残雪がある。今年の大雪の一端がここにも残っていた。今日は7月30日、小桜平のハクサンコザクラはまだ幾分早いようではあるが、一部では大満開で見事であった。

そこにはあたかもハクサンコザクラしかないかの様に見え、まるでジュウタンの様でもあった。妻は大満足で楽しくてたまらないかのようであった。しばしハクサンコザクラに見とれる。すみっこの方にはクロユリも咲いていたが、ハクサンコザクラには全く及ばなかった。小桜ヒュッテには先客がいて、昼飯を食べていた。私達もここで昼食をとることにした。妻の目にはこういう無人の山小屋が珍しく映るらしく、キョロキョロしていた。ブスのゴーっという頼もしい音を聴きながらラーメンを食べ紅茶を飲んだ。このひとときがまさに最高である。1時頃小桜ヒュッテを出発し、楽楽新道より下山する事にした。楽楽新道は見晴らしが悪く、最後になって急坂が続くのであまり良いコースとは思えないが、同じ道を引き返すよりは良いだろう。4時頃岩間温泉に無事降りてくると、そこに待ち受けていたスバルレオーネが、とても頼もしく感じられた。岩間温泉で昨日からの汗を流し、ノドにキュッとくる冷たいヤクルトスカールを飲んでこの山行を終えた。

簡易薄型標本箱試作二案

金子 二久

(標本)棚を見ながらこう考えた。虫を集めれば箱がいる。箱を買うには金がいる。箱を入れるには場所がある。とかくこの家は住みにくい。と言う事である。いろいろ調べてみると、ここ一年間一度も触れていない箱が多い事に気がついた。それにウスバシロで九箱、ベニヒカゲで七箱もある。なんとかしようと考えた。

ここに私のふつつかなる二つの工夫を記し、諸兄のご批判を仰ぎ、より良い方式を見つけたい。

第一世代：ベニヤ板(430×600×2%)の周りに15%の角材をめぐらす。その板に針を短くした標本を並べる。枠に1%のプラスチックの板を張りテープでとめる。見かけは良くない。又防虫剤の補充も面倒だし、昇華も早い。最大の難点は下がベニヤなのでピンが刺し難い事。しかし全体で厚さが20%以下になる。実際には両面を用い、棚には立てて用いている。

第二世代：何かベニヤ板に代わる材料はないかと探していた。発泡スチロールは針が抜け易い。パルサ材にはそんな大きなのはない。学会で展示に使われている硬質発泡スチロールに気がついた。その7%板を用いて作ってみた。スチロール板をかこむ様に14×47%の角材で枠を作る。その枠を0.2%透明の亚克力の箱におさめる。蓋はやはりテープで止めている。亚克力は軽いし、工作しやすいので多方面に使える。欠点は静電気がおき、傷つき易い点等である。その点ガラスは確かに良いのだが重くなる。現在ウスバシロ、ベニヒカゲを移しつつある。

この方法の最大の問題は針を抜く事とラベルの表示に一工夫必要な所である。

ある時中西氏宅にお伺いしたら、第一世代タイプの額が見事に飾られていた。同じ様な事を考える人はいるものだ。

昨年の夏、都内の某デパートで催された“昆虫展”を見て感じた事について少々書いてみたいと思う。

この昆虫展は、都内のある昆虫同好会が主催して行なわれたもので、その内容は身近な昆虫と南国の珍しい昆虫とを一同に展示したもので、今をときめくヤンバルテナゴコガネの生態展示標本等もあり、結構目の保養をさせて頂いた。

また、小さな囲いの中では南国の珍蝶と何処にでもいる普通種がそれこそごった煮のように放飼いされていた。みんな天井や壁にぶら下がったままで動こうとしない。中には花屋に売っているような鉢植えの花に止まったままでじっとしているヤツもいる。

そんな中で私は生まれて初めて生きたオオゴマダラやスジグロカバマダラといった南国の蝶を目にした。私と南国の蝶達との出会いは、何とも味気無いものだった。そしてその小屋の中には、「チョウにはさわらないで下さい！」と書いた札があちこちに掛けてあった。それを見た瞬間何とも不愉快な気分になり、もうその後は何もかもムカムカするものばかりであった。1番腹が立ったのは、デパートの昆虫展ではお馴染みの即売場である。図鑑や蝶に関する本等ははまだ許せるとしても、1組〇万のあの外国の蝶の標本は何なのだろう。

私は、こうした商売意識と結び付いた同好会に対してとやかく言う気はないし、そんな資格もない。ひょっとすると子供達に虫を紹介する気持は真剣だったのかもしれないし、最終的な部分で商売人に利用されただけなのかも知れない。しかし、デパートで開かれる昆虫展についていつも言えることは、必ず商売が入るということである。その中で、訳も分からず惑わされた子供達は、お金を出して虫達を買って帰るのである。売る側としては、「世の中には、こんな美しく変わった虫がいるのですよ」と紹介し、子供達の好奇心をあおるだけならまだしも許せるが、「こんな珍しい虫が欲しいでしょ」「欲しければ買いなさい」という風に持っていくのである。

虫を飼うことでその生態に触れ興味を持つことは素晴らしいことであるが、カブトムシやクワガタをまるで生きたオモチャの怪獣を買うように考えていることはどうだろうか。そんな親達に言いたいのは、冷房のきいたデパートの中で動きが鈍くなった蝶達を見せる暇があったら、1日山へ出かけて太陽の下で活発に飛び回る蝶達を見せてやって欲しいということだ。虫なんてものはお金を出して買うものでなく、自分の手で苦労して捕らえるものである。自分の手で採った虫ほど愛着があって可愛いものはないということを教えてやってほしい。私は蝶を見つけた時のあの何とも言えない胸の高鳴りがとても好きだし、ネットした時の感激はいつになっても忘れられない。このような感動は、お金では買えないものだし、最近無感動な子供が増えたというのも、このような体験がないからではないかとおもう。私は将来少なくとも子供達には感動する心を伝えてやりたいものだとおもう。

(追記) 時の経つのは早いもので、つい先日までやれ年末だ、正月だと騒いでいたのに、もう新しい年もひと月過ぎてしまいました。同様に私が蝶談会の末席に加えて頂くようになってから早5年となります。そして、“翔”もついに記念すべき50号を迎えることとなり、これも一重に編集に携わってきた方々の御苦労と会員諸氏の絶ゆまぬ努力の賜物であると思います。私のように、日頃会の活動に対し何の力にもなっていない者には、このような文章でお茶を濁すことしか出来ず全く恥ずかしい思いで一杯ですが、編集者の御厚意により、貴重な数頁を裂いて頂いたことに大変感謝申し上げますとともに、今後蝶談会発展のために、ささやかながらお手伝いが出来れば幸いですと思っております。

ニューフェイス紹介

野 中 勝

広畑 政己氏 ☎671-22 兵庫県姫路市打越1343-259 ☎ 0792(66)5977

以前兵庫県でヒロオビミドリの採卵をする際に生息地を教えて頂いて以来、様々な面で御指導を受けており、今回無理にお願いして入会して頂いた。蝶には本格的に取り組んでおられ、多くの優れた報文を「ひろおび」(播磨蝶友会)、「てんとうむし」(姫路昆虫同好会)、「昆虫と自然」、「ちょうちょう」等に発表されている。今後兵庫方面へ採集に出掛ける方は、氏に連絡すれば色々と有益な情報を頂けると思う。

ニューフェイス紹介 (前編 結婚騒動)

諸 道 秀 人

諸道ひと美 昭和37年生 A型 住所 諸道秀人に同じ

金沢で言えば平栗のような所で生まれ、田舎の百姓の4女としてカタブツの家に育った。恋愛結婚は邪道、人間のすることではないという変な家に育っていた。天津の大都会へノコノコ出てきて生まれて初めて恋をしたのが今をときめく美青年、諸道秀人様であった。実家、親戚中の猛反対に合い、いやがって逃げかかっている美青年にしがみつき、金を取られ、体を奪われてもどうすることもできない彼女は、美青年と駆落、同棲を繰り返すのだった。 つづく

1984年12月29日時ならぬ大雪ではあったが、そこは並の人間とは違う一団が中西重雄氏宅に集まり、野中勝氏を座長として1984年の石川県昆虫界10大ニュースと1985年の展望について話し合った。7時より始まったこの会合は盛況で、時のたつのも忘れ延々翌30日の2時まで続いた。この間中西夫人はコーヒーを入れ紅茶を入れ、アイスクリーム等々、夜が深まればカップラーメンを買いに行きお湯を注いでくれ大変なサービスぶりで、はてはオニギリを食いたいと言えばオニギリがでてきた。この様なバックアップがあってこそ楽しい会合が2時まで続いたのであり、中西朱美氏には蝶談会一同大いに感謝していただきたい。それでは中西朱美氏に感謝しつつまずこの日決まった1984年石川県昆虫界10大ニュースをお知らせする。

1. ムモンアカシジミ再発見

2位以下を大きく引き離して堂々のトップ。だれもが文句なく決定した。これまで26年間再発見されなかったのは、松田俊郎氏も書いているように「発生時期が他のゼフィルスより遅く我々の行動からすれば空白になっていた」からだとおもわれ、この8月上旬は最も暑く採集バテがでてくる頃でもあり行動の空白になっていたとも考えられる。この26年間だれもが陥った採集バテ→ビール地獄(極楽?)を乗り越えなければこの再発見は有り得なかっただろう。この前人未到の偉業に対して1984年石川県蝶屋NO.1に松田俊郎氏は選ばれ、この偉業が1984年のNO.1となった。

2. 中西重雄氏の骨折よりの回復(トカゲの尻尾的回復)

1984年6月氏は生き埋めとなり骨盤を折るという災難にみまわれた。胸より左大腿部にかけてのギブスをはめられた氏は3日程おとなしくしていたらしい。4日目よりギブスをつけたまま動き回り、看護婦さんを驚かせ1ヶ月もたつと行動範囲は病院の1階から屋上にまでひろがってしまった。なおも驚くことに廊下でジョギング等をしており、見舞い行くといつも部屋はもぬけの空だった。2ヶ月してやっとギブスがとれるとすぐこっそり抜け出して医王山へ行き、メスアカを採卵し木にも登ったという。3ヶ月たって退院した頃はすでに常人以上であった。「半年たっても歩けるかどうかは気力の問題だ」と話していた医者は、こっそり中西氏の記録をとっていたかどうかはわからない。

3. ゼフィルス卵豊産

ヒサマツは芽が真っ白になった18連発があったりして、半日で1000卵位は採れるでしょう。(中西重雄)

フジは大雨の日でも80卵採れた。(野中勝)

フジは3連発もあって今年は4回通って302卵採った。(勝海雅夫)
メスアカも多いよ僕でも採れた。(井村正行)
これはエキスパートの会話であろうか、はたまたイモの会話であろうか、
とにかく今年は豊産なのです。

4. エゾミドリシジミ採卵法確立

これまで大変効率が悪く、採してもいなかったエゾミドリシジミではあるが、勝海雅夫氏によって関西圏採卵法が導入され、中西重雄氏を経て会員諸氏に普及した。これにより石川県虫屋の採卵技術がレベルアップしたのは言うまでもない。宝達山、宝立山のゼフィルス採卵調査では絶大なる威力を発揮した。これはまた勝海雅夫氏をたたえる意味も含んでいる。

5. オオチャイロハナムグリの採集

石川県ではこれで多分3頭目の記録であるとおもわれる。甲虫屋が必死になってもなかなか採れないらしい。

6. 白山でコヒオドシ目撃

これまで長い間白山にはコヒオドシがいるとかいないとか騒がれていたが、今年竹谷宏二氏によって確実な目撃記録が得られた。オオチャイロハナムグりと5位争いをしたが目撃記録ということで6位となった。

7. 会誌“翔”のワープロ化

これまで翔は手書きコピーであったが、NO.48(1984年12月20日発行)よりワードプロセッサを使用した活字コピーとなった。これまで以上に読み易くなり、内容もボリュームアップした。これによって編集人のボランティアもボリュームアップしたことは見逃せない。

8. ユキワリツマキチョウ飼育への挑戦

ユキワリツマキチョウの飼育は古くから行なわれており完全羽化個体も得られている。ところが、金平永二氏は詳しい文献も得られず適切なアドバイスも得られず孤軍奮闘し、同時期にクモツマキとツマキをそろえ、その飼育においては詳しくデータを残し、翔 NO.49紙上に発表した。この努力と労力がNO.8となった。

9. フタスジカタビロハナカミキリの採集

だいたいのニュースは出てしまい、10大ニュースとしたばかりにオマケが2つ付くことになった。ヤマシャクヤクの花を食べるこのカミキリは毎年安定して採集されているが、6月の第1回蝶談会採卵大会でも採れたことだし10大ニュースにまだカミキリが登場していないので、9位となった。

10. アカシジミ多産

3位のゼフィルス卵豊産に含まれるが、中でもアカシジミは大発生したらしくクヌギを探せばいくらかでも幼虫がみつかった。市街地を飛ぶ本種も見られたという。

それでは次に各人の1985年における展望をお知らせする。これらを実現させるべく各人頑張ってもらいたいものである。カッコ内は提言者。

- (1) 採幼、採卵会を年3回以上する。(幹事)
- (2) 石川県未記録種ヒサマツミドリ、キリシマミドリの調査 (中西重雄)
- (3) 石川県未記録種チャイロヒメコブ、エゾナガヒゲ、ソボリングの調査 (井村正行)
- (4) カラスシジミの調査(松井正人)
- (5) 能登のゼフィルス調査アイノ、エゾ、ミズイロ、アカ、オオ、ウラゴマ、ジョウザン(以上全員)、ウラクロ(吉村久貴)、ウラキン (中西重雄)、ダイセン (松田俊郎)、オナガ (松井正人)、ウラナミアカ(松井正人)
- (6) 加賀でオオヒカゲの調査 (松井正人)
- (7) ホシチャバネセセリの採幼 (勝海雅夫)
- (8) 我谷でムラサキシジミの調査 (吉村久貴)
- (9) イカリモンハンミョウの調査 (吉村貴己)
- (10) みんなにくっついて行く (野村 明)
- (11) 石川県でミヤマシジミの調査 (山岸善也)
- (12) 石川県でキマダラルリツバメの調査(松田俊郎)
- (13) 能登でクロシジミの調査 (勝海雅夫)

<編集後記>

“翔”が50号になりました。1978年11月に1号が発行され約6年、この間に発行された“翔”の中には、石川県の昆虫に関するデータがぎっしり詰まっています。月日のたつのは早いものですが、“翔”を眺めるとこの6年間の足跡をしっかりと見ることが出来ます。これも会員諸氏の心意気、努力、奉仕なくしては有り得なかったことです。本号は50号を記念し特大号ということで、会員全員の原稿を載せようと張り切り、皆さんに大変無理な原稿依頼をお願いしましたが、多大なる原稿をもってご支援いただき、まことにありがとうございました。

本号の編集に際しては、これまでの単独編集人方式をとらず特別編集チームがあたり、ようやく特大40ページ余の“翔”が完成したものです。

この50号も会員の心意気、努力、奉仕の賜物であり、これからもこの心意気を忘れず、“翔”を益々舞い上がらせるよう願って編集を終えさせていただきます。

百万石蝶談会會員名簿

昭和 60年 3月 現在

氏名	住	所	電	生年
井村正行	金沢市			
小幡英典	金沢市			
大島國雄	長野県			
金子二久	金沢市			
金平永二	金沢市			
勝海雅夫	金沢市			
近藤征四郎	金沢市			
嵯峨井淳郎	金沢市			
白水隆	福岡市			
高羽正治	金沢市			
高平正明	河北郡			
竹谷宏二	松任市			
田辺幸雄	河北郡			
中西重雄	金沢市			
中西朱美	金沢市			
野村明	金沢市			
野中勝	金沢市			
広畑政己	兵庫県			
松井正人	金沢市			
松井泰子	金沢市			
松田俊郎	石川郡			
水野透	富山県			
諸道秀人	滋賀県			
諸道ひと美	滋賀県			
山岸善也	福井市			
(帰省先)	金沢市			
吉岡泉	大阪府			
(帰省先)	金沢市			
吉村久貴	金沢市			
吉村貴己	東京都			
(帰省先)	金沢市			



NO. 50 (記念特大号)

1985年4月5日(金)初版発行

1985年5月5日(日)改訂版発行

発行 金沢市大場町東871の15 松井正人方 百万石蝶談会

編集・校正 松井正人・他